p21 ト 28.
p28. ト 27

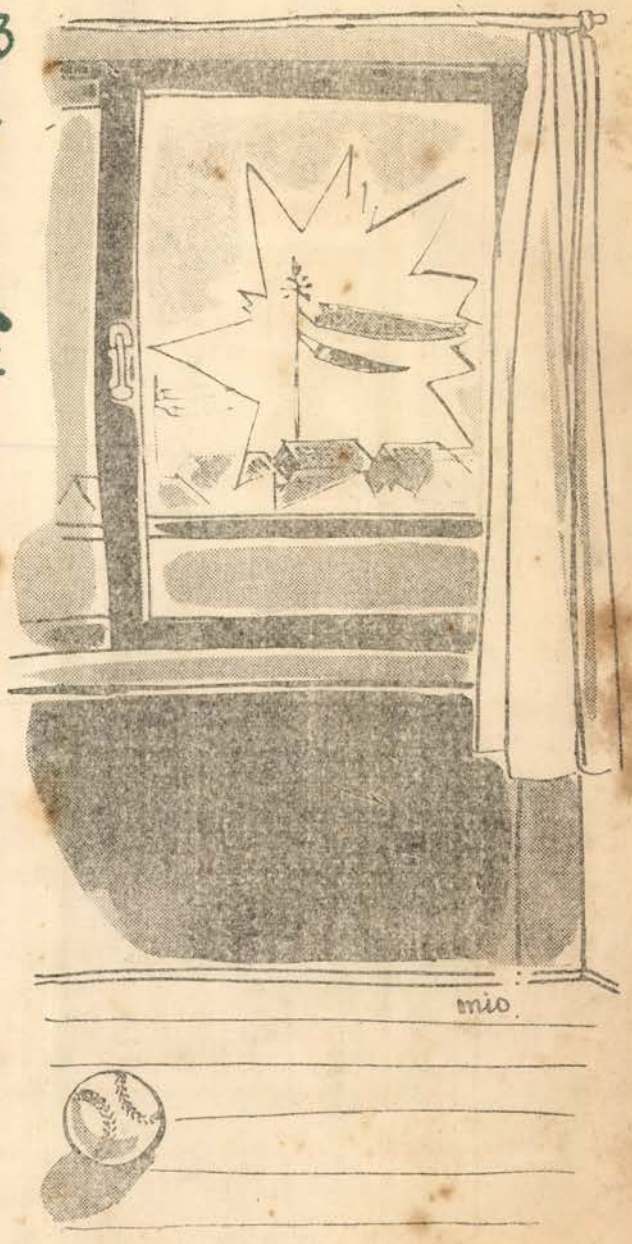
川柳の雑誌

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land-linon

The Senryu Zasshi

No.324



五月號

昭和廿九年五月一日印行第九卷第五號（毎月一回一日発行）
創刊大正十三年通卷・三百廿四号

本社五月句會は

五月八日（第二土曜）午後六時＝下寺町二丁目市バス停前　光明寺に於て
兼題「平和」「並木」「片思い」・柳話・句評其他――来会歓迎

五月號目次

（昭和二十九年）

題字……麻生路郎
表紙……米田三男之介

「旅人」を讀んで……長野晴浜…（三）
最後に求めるもの……三条東洋樹…（一四）
川柳ストレプト・マイシン……北川春巣…（一六）
祭日四方山話……古方、白柳子、梨里、丁路、しげお、…（二二）
川柳時評……藤本満年…（一八）
人間横丁(XII)……東野大八…（七）
孝行のまねごと……小池しげお…（二三）
川柳第二教室……戸田古方…（二五）
神五題……福田山雨楼…（一四）
平徳子……富士野鞍馬…（二六）
里十九逝く……（二六）
おやぢさま里十九を偲ぶ……水谷鮎美…（二六）
里十九親分……須崎豆秋…（二七）
里十九句抄……（二七）
BK放送川柳……西尾栞選…（一五）

★

近作柳樽……麻生路郎選…（一八）
川柳塔……麻生路郎選…（八）
同舟近詠……諸家…（二）
「身の上」……市場没食子選
一路集「恋敵」……松江梅里選…（二八）
各地柳壇……（三〇）

★

不朽洞会から……（三五）
柳界展望……（二九）
公私雑記……（三五）

OSK
毛織物
既製服　製造卸商
株式会社　大坂商店
大阪市東区糸屋町一丁目二
電話東(94)一七四五番

洗濯
引き
いつものがいゝと富屋へ電話なり
せんば
富屋
御集会用にも御用命を
大阪東区唐物町船井地
電話船場(25)三二八一番

路郎句集「旅人」を讀んで

長野晴濱

一

二階を降りてどこへ行く身ぞ

巻頭のこの句を読んで、私はたゞびつくりしてしまつた。暫くは茫としてこの句を繰返していたようである。「ようである。」というのは、たゞ全く驚いてしまつて、すぐにはこの驚きを解剖するような余裕もなくぼんやりして終つていたからである。

この村の　詩人
が炭を　焼くけ
むり　（二字アキは本文では新行）

次に遇然に私は巻末をあけてこの句に出あつた。そしてまた同じようにびつくりさせられた。私はこの二つの句を與えてもらつただけでも、この本の出版に対して感謝してよいと思つた。

川柳は詩である筈である。だが、川柳作家でなくて唯の鑑賞者である私には、詩の一ジャンルである筈の川柳から、詩を感ぜしめられる場合は可なり少いことを告白せざるを得ない。（もつともこれは短歌や俳句からでも然うであるが、そしてそれは私の解釈の到らなさも相当手傳つているものと思うが。）

おかし味、皮肉味、矛盾発見の鋭さ、実にうまいことを言う巧さ、至言、等々、然いつたものを私は軽く見ようとは思わない。そういう文藝は人間の世を樂しく明るくするであろう。そういう類の面白さを私は川柳に見出だして思わずニヤリとさせられたり、「うまいこと言つたもんだなあ。」と感心させられることは少くないが、でも、感心しながらもそのまま軽く通つて終えるようなものでなく、何か斯う、頭をどやしつけられ、胸の中へ指を突込まれ、しつかりしろと背中を殴られるような感じで、そう樂々とは読み進んでしまえないものを、比較的余りにも多く私はこの句集に於て発見する。それは禪の一喝であり、痛棒である。何をぐずぐずしているんだ、眼を開け、という声である。

二

古句

居つづけの迎へおつこち
そうな腹
生れると目のある子かと
座頭きき
梶原は聞いたきいたの始
めなり
そへ乳して棚にいわしが
ござりやす
てんでんに良い女房を持
つ氣なり
泣きながらまなこを配る
かたみ別
女房と相談をして義理を
かき
ばばが名はぢちいの腕に
しなびてね
ふんどしのきらひなおや
ぢ碁が強し
伏木から出るとしこたま小
便し

以上の古句、私は藏書一切戦災で焼かれてしまつたので、古い記憶に頼つて覚束なくも並べてみた。文字は自分勝手。その他にも間違があろうと思う。あつたらごめん下さい。

だが何で私はこういう古いものを此処へ持出したか？私は斯る句から、現代の句、殊に麻生路郎の句に到るまでの距離の非常な大きさと、それにも拘らずその間の時間の非常な短小さとを、自分で再確認してみたかつたからである。

古事記、日本書紀に和歌が現れてから、万葉集、八代集、十三代集を経て、徳川時代を通して、睡りながら命脈を保つて来た和歌が、明治の後期に至つて、「貫之はへたくそな歌人に有之候」との子規の革新へ新発足から今日の短歌に到るまでの長い、遅い足どりに比べてみて、川柳の、あの久しく押えつけられていた、併し実際には生産という人間の致命的大事に従事していた庶民階級の当然の勃興から、すでに明治維新の産業革命、文藝復興を孕んでいた気運の一つの開花である庶民文藝川柳の、明和の頃の創始から、前出の古句のような経過を通して、今日の麻生路郎の句の高峰に到つたまでの時間の何と短く、その進行のテンポの何と速かつたことか！

思うに川柳界にも、私たち門外漢の知らない優れた人々があつたのであろう。だがそれにしても、川柳は、大たいは前掲の古句の如き、穿ち、人情、おかしみ、ふう刺、うまいこと、を言ううまい言葉であつて、詩というには可なり隔りのあるものだつた。創始当時の、景気のよい、大なり小なり生活に余裕のあつた庶民の遊びの一つであつたとも思われる傳統からは容易にぬけ出られなかつた、というよりは、そういつたことは気付かれなかつた。だが明治の子規が、従来の和歌から脱して、短歌の往くべき新しい路を開いた如く、大正昭和の麻生路郎は川柳の旧套を早くぬけ出して、新しい短詩にまで

川柳を昇華し高揚したのであつた。

私はここで「旅人」から少し抜書してみよう。

三

胸を打たれる句、心を開かれる句、君しつかりしろよと言われるような句は「旅人」の到る頁に見出だされる。私の感受を大ざつぱに大同的に別けて、句を抜きまとめて見る。

（一字アキは本文では別行組）

1

二階を降りてどこへ行く身ぞ　（旅二頁）

紙屑をまるめてすてるに等しき　（〃　五）

ふと眼をやれば煙突にけむりなし　（〃八〇）

象徴というか、私の勝手な言葉がゆるされるなら「抽出」とも言いたい。句の方から言えば象徴であり、それに盛られたものの方から言えば抽出されたのであろう。私はこれらの句に、それを言つている当事者の、それにもまして長い長い諸ろの幾世代の人生に於て、これからも繰返されるであろうところの、多くの人々の、それぞれの人生上のさびしき一枠を見せられる。

斯ういう句は損な句であるとも言える。先ず、むずかしいというのでは無いが、少し落付いて読んでもらわねばならない。それから「凡聖一如」等のように派手でない、くすんでいる。いぶしの下の黄金はどうかすると看過されてしまう。句碑向きの句では無さそうだ。

だが私は斯る句のゆえに川柳詩人麻生路郎を偉とし異とする。彼の何ものにも屈しないような心構えと、洒脱な爽快な態容の奥に、斯ういう句を—彼は、僕の句はさびしいと言つていたが—歌い出せるものが静かに根をおろしていることを思うと力強い。

併しこの種の句は、さすがに「旅人」全巻を通じて少いようだ。前出の句はその手法と内容とが全くぴつたり融合しており、韻律的なひびきも細く長く緒を引いている。私は間違つていないつもりである。更にこの手法が如何なる発展を後々見せて呉れるかが大きな楽しみだ。

2

祈つた甲斐もなく共産黨の中にゐる　（旅　二一）

天才へ　親類あんなものと云ひ　（旅　六七）

いつからか死後の準備もしてるなり　（〃一五一）

いつのほどにか　二号に養われ　（〃一六五）

まちぼけをさされてもまだ信じたし　（大二二四）

愛人が雪の中の黒点となりぬ　（〃二三七）

椅子の背に　もう青春が消えていた　（〃二四九）

首しめたまでは憂えている　（〃二五二）

嘆き　子を死なし　学校に　子の多いこと　（〃三一四）

遺髪が戻り　遺骨が戻り　本人が戻る　（〃三九五）

孝行はいいが　男がしなびて來　（不六四四）

独り合点かも知れないが、私はこの2の群を1の具体的表現、描写、照出と理解する。かれには限りなき哀れを、そしてこれには、個々のケースの哀れを、更にこれらの作には、おかしいと表立つて言うのが憚られるようなおかしみを裏付けている。肉付きのよい作である。なおこの群の一、四、五、六の句のスタイルが1の諸句と凡そ等しいこと、やはり美しいひびきを感じさせること、等しい手法が異つたテーマに使用されて何ら破綻を見せていないことに注目させられたことを言つておきたい。

3

歯が痛い　さうかと亭主出てしまい　（旅　一四）

落第か　そうかと　親は云つたきり　（大三四〇）

返事だけしといて　雲をまだ見て居　（不四七七）

一と二、同じような句で呼吸が違い、切れ方が違うのは何か子細があるのか、あるならきいてみたく思う。こんな処にも川柳の詠み方に用意があるのだろうかと思うのは思い過しかどうか。三は私らも覚えのある或る瞬間の浮世離れしている心持である。そぞろに微笑を催させてくれる。

4

君・君　もう少し靜かにし給へ　蠅　（旅　五七）

芳紀まさに六十一を　ほほえまむ　（〃一二六）

母と子の　蚤が　互ひに入れかわり　（大二八七）

近衛内閣總辞職

麿一歩退き　小手をかざしたり　（不四四七）

燈下管制　そこへ大きな月が出た　（〃四五八）

君・君・憂鬱を配つてあるくのは止せよ　（〃四七八）

うれしさに　盲は一つ踏みはづし　（〃四九一）

女の笑ひごえ　幾つもかさなりあひぬ　（〃六一七）

天皇へ　民のかまどが　停電し　（〃六五八）

この作者の機智と才気が光つている。私はここで單純におかしく娯しい。人生は深刻ばかりを要求しはしない。これらの句の、斯る句にとかく付き物であるしつこさ、騒がしさから全然独立している灰汁（あく）ぬけぶり、すつきりぶりを珍重したい。

5

君見たまへ　菠薐草が伸びてゐる　（旅　六四）

親船を離れて　きりきと舞ひぬ　（旅一五七）

水車小屋ここから隣り村になり　（大三九三）

ふるさとは　蟻　右から左から　（〃四一九）

聖書一冊　菊一輪の二階也　（不四四九）

裸婦を押さえる　鋲の輝き　（〃五四七）

これからは川柳には比較的少い自然詠である。しかも必ずしもユーモアの遠景近景を裏に含んだ句とも思えない句である。思うに川柳としては取組みにくいテーマなのではあるまいか。それを斯う鮮か

に浮出して眼にまざまざと映し出させて呉れている。一寸近よれない気がする。だが私としての一つの疑問は、この中の第一、三、四、五などは川柳か俳句か識別のよく付きかねることである。句作者の感受と看取と抽出とが、どうでも斯うさせるより他になかつた、全くぎりぎりの詠出なのだとは推するが、斯る句には五、七、五的調子は避ける方が安全か、など言いたくなる。

四

6

遊ばしもするが　意見もする
女將（一字アキで同行）　（旅　六八）
しらじらしき悔みの淀まず
（〃一六一）

むつとしたが　子どもの頭なでておく
（大三〇二）

第一の頼もしい、而して善なる女將は、また場合によつては惡を出して、第二、第三とやるだろう、胸の中でべろべろ舌を出しながら。もちろん三つの句はそんな連絡をとつたものでなく、第二は多分女であり、第三は多分男らしく思われるが、これがもつとはつきり性別が出ていたら、読む者はそれぞれの場合、光景を想像し得て、ヨリ興味深いであろうが、短詩としては其処まで言えず、また言わずとも、読者の方が何から何まで想像して鑑賞すべきなのだろうか？

7

凡聖一如　元旦の　こころ知る
（旅　九七）
酒とろりとろり　大空のこころかも
（大一七〇）

立派な句、大きな句である。だが眩惑されきつて終わずに繰返してみると、内容は別段奇ではない。酒のみならずとも詩人ならずとも、時にはこんな気持になることもある。ケチな男が酒の上でイヤに気前がよくなつたり、口やかましい婆さんが、まあ〳〵今日はお正月だから、と孫の惡いたずらを我慢してやる……こんな気持とも通ずるごく当り前の句である。では平凡の句かと言うと、まあ待つて下さいである。上は天皇から、下はルンペンに至るまで、大なり小なり潜ませ持つている斯うした気持を何人（なんぴと）かこんな風に表現できるか？大きく、悠々と、こせつかず、光を保つて。

新古今集、春歌上、卷頭二番目に据えられた太上天皇すなわち後鳥羽院の

ほのぼのと春こそ空に來にけらしあまのかぐ山霞棚引く

が思出される。如何にもおほらかな、廣い、溫い、光のある、豊かな気持がのたりのたりと大きなうねりを見せている。

8

妻や待たむ　靴音を　高めんか
（大二七六）
花見にやりましたと　亭主手習
（〃三四八）
夢を見てゐるうち　家賃滯り
（不五四三）

第一の句、何と可愛いご亭主さんか！宴会でおそくなつたのか、会社の仕事が時間外に及んだのか知らないが。また歌を思出す。

泊瀬川夕わたり來て我妹子が家の金門（かなと）に近づきにけり
（万葉集卷五）

良人はサラリーマンで、その勤務から出張旅行の多い新婚夫婦に私はこの歌を書いて言つた。ご亭主さんが、旅行からの帰路、家に近づいたらこの歌を口ずさみ、細君の方もその時分に同じく口ずさむんだ、これを忘れず、旧郎旧婦になつてもやるんだよ、家庭和合のおまじないはこれに盡きると。併し良人が川柳人であるご夫妻には、すすむるにこの銘吟「妻や待たむ」を以てしたい。

第二第三、ひようびようとした人柄の裏に、案外深くものを視ており、そのくせ何処かユーモラスな処もある好もしき人物が浮び出て来る。句の呼吸の彈み、休み、調子が、よく物を言つている。

9

まだ嘘が　半分（はんぶ）まじつた　辞世なり
（旅　六五）
わかれたらとも思ひ　死んだらとも思ひ
（大二五一）
絹夜具の中で　滅俸案生れ
（不五三七）
殺すことにきめて　其の夜は寢たりけり
（〃六一七）

新聞の社会面などに出て来る、それも大きな見出しで報道されるような舞台面である。わるく行くとえげつないばかりで詩的効果のさつぱり無い、ただの文言のつながりに墮するであろう。余程卓拔した腕即大きな技巧を自在に駆使できる人でないかぎり取組んではあぶない題材だと思われるが、これらの句は作者の神経と頭と腕に掛つて見事に料理されて成功した短詩川柳の例と言えよう。

10

拾ひ屋のすがたも霞む　窓にいる
（不四五二）
誰が捨てた　草鞋か　氷張りつめる
（〃六一九）
翠光居を訪ねて
この村の　詩人が炭を　焼くけむり
（〃六九八）

もののあわれ、平安朝文学の核心とされ、日本文学に長く緒を引いて来たこの「もののあわれ」の理念、はた其れから流出している綿々たる情緒が、川柳という文藝に、斯く成功して取入れられた例しはこれまで殆ど無かつたのではなかろうか。普通一般には、川柳理念（そういうことが言えるなら）に「もののあわ

アサヒビールは
あなたのビールです
朝日麦酒株式会社

れ」が取入れられていいと考える人さえ殆ど無かつたのではないだろうか。若しそうだとすれば、詩人麻生路郎は、ここにも川柳に一新境地を発見開拓したものと言えるのではないだろうか。

日本文学であり、詩である川柳が「もののあわれ」を看過してよい筈はない。併し、其れを如何に取入れるべきかは技巧上むづかしい問題であろう。殊にこの例に於ては、5の群に於ると同じく、川柳と俳句との境界は紙一枚の際まで来ている。もう少しシキリをはつきりしたいが、これは如何様に捌かるべきであるか？私のひが眼であるならむしろ幸せであるが。

だが第三の句は、前記の心配を形の上に見せてはいるが、誦せば誦すほど、有ること難き姿を見せて来る。被衣の下に吹かれる笛の、めん〳〵たる、じよう〳〵たる、りよう〳〵たる、長く緒を引く音色もひびく。翠光居主人氏は羨まるべきである。

五

以上私は、句集「旅人」を読んだ感じを覚束なくも大ざつぱに整理してみた。引いた句は、これを書く時にばらばら頁をひるがえして眼に当つたものであり、それらの句だけがよいなどと言うのではない。前にも言つたが、心打たれる句は隨処隨頁にある。斯ういう良い本を出して頂いたことを感謝する。

終に少々希望條項を述べてみたい。

▲かなづかいを統一したい。「旅人」處載の句は甚だ長い年間にわたる製作である。この編集法では各句の年代はわからないが、察するに、昭和二十一年九月、「現代かなづかい」が制定された以前の作には当然「歴史かなづかい」を用いたのを、その儘に集録されたのであろうか。これも一つの考え方ではあるが、すでに八年近くを経て、「現代かなづかい」による読み書きを教えられた学校卒業生がうんと出ている現在である。「歴史かなづかい」は年配者にはわかるが、十代二十代の者にはわかりにくい。「現代かなづかい」なら両方にわかるという得（とく）もある。ただ短詩の性格上、そうした便宜にばかりも従えまいが、新旧制かなづかいの一冊の著書中の混在は、その理由の知られない限り、見たところ体裁が整わず、また、すぐ物事を割切りたがる一部識者の誤解をも招こう。普及版なりと出版される場合には、新旧いづれかの統一、殊に新制への統一が望ましい。（だが、そういうことを言う私が、短歌及びその詞書には今以て旧制を用いていることを告白しておく。）

▲特別研究会を持たれたい。麻生さんは川柳界の巨匠であり、殊にマヤカシの無い、ムクの（金ムクなどという意味のムクの）大川柳家であり、更にまた川柳界を現在の如く大きく、廣く、且つ高くした川柳運動家である。だが川柳人は斯うした少数の人々に頼つていてはならない。川柳界の向上のために、更にまた其れをもたらす要因である自己研精のために努力すべきであろう。そういう意味で、川柳雑誌に拠る川柳家諸氏は麻生さんを囲んで、毎月の句会とは別に、特別研究を持たれたい。

そもそも先生は如何にえらいにしても、その門に集つた人々は、先生に感歎し、圧倒されきつて、ただ先生に追隨するだけではなるまい。やがては先生を跳躍台として、自分の個性に基く、新しい高峯への飛躍を指向すべきであろう。そういう意気で当つて行く時、先生は喜んで人々の跳躍台となつて呉れるであろう。研究課題を持寄つて徹底的に論議を盡す。時には先生をも含めて誰人かを吊しあげているかの観あるまでの論争、時には問題を腑わけして小委員会的に行う研究の報告。斯くして個と全界との成長は促進されて停まらないであろう。これは門外、事に通ぜざる者の僻見であろうか？

▲普及版を出されたい。句集「旅人」は本当に立派な本である。ただに川柳界の人ばかりでなく、文藝に詩に興味を有するあらゆる人々の読んでよい本である。五百部に限定出版されたのは如何にも惜しい。

「旅人」の構成部分、旅人、大空、不死鳥はその質に於て、量に於てそれぞれが一部の著書として出版される價値を持つている。その三部分が一冊として出されたのであるから、八百円は比較的には高價とも言えないであろう。だが絶対額としての八百円は易々と支拂える額でない。世の渇望者のためにぜヒ廉價な普及版を出して頂きたい。

×

私は或は「分りもしないくせに勝手なゴタクばかり並べやあがつた。」のかも知れない。実際私は句集「旅人」に可なり酔わされている。酔態非礼が若しあつたら、麻生さん及びその門の斉々たる川柳家諸氏の寛恕をお願いする。

（筆者は歌人）

麻生路郎選評　山陽図書KK版

山陽川柳

一一八九人作家集　総句数二二四七句

A5版　二三七頁
定価　二〇〇円
〒　二四円

大多数の作家は新聞柳壇から生れた。本書は山陽新聞柳壇の作家の佳吟集である。選評は本誌の主幹麻生路郎先生である。本書を熟読することによつて初心者と雖新川柳の良き作家の列に入ることが出来るように編纂されている。一読を請う。

取次御注文は　川柳雑誌社

大阪市住吉区墨内芳代西五丁目二五
振替口座　大阪　七五〇五〇

人間横丁（XIII）

東野大八

隠語

お互いの言うこと話すことが、よく通じあうことは気持のよいものである。しかし通じすぎては困る場合も多い。ことのかけ引、作戦などの場合がそれである。人生の裏街道を歩く渡世人や、斬ったはったのやくざの仲間、それを追う刑事や新聞記者など、仲間うちにしか通用しないフチョウみたいな用語をもっている。人呼んで俗に「隠語」というが、誰が作って誰がひろめたものか、この陽の当らぬくずし単語には、しかしいゝ知れないニュアンスがある。なかには〃よくもいゝえて妙かな〃というケツ作もある。商売柄私もこの、おかしな言葉をよく口にするが、そのたびに思うことは、これら隠語の持つヒマキが、至って川柳的な何かに通じているということである。

こゝに紹介する三つの世界の隠語は、彼等の仲間が用いているものゝ、ホンの一部にすぎない、しかしその各自の世界をうがち得てまことに適切なものがある。刑事の用語は、この世界に不可分な新聞記者と同一フチョウである。刑事のチョウフ（符号）が判らねばこの商売でメシが食えないからである。

香具師のものの一部は、落語、漫才、講談などに用いられ、仲間内でなくても一般化し一種の俗語として世に通っている。スリはところによって異るらしいが、しかし四百余州マタにかけているこの渡世人には、こゝに掲げたものがオーソドックスのものらしい。でなければワタリが効かないからである。

いずれにせよ。隠語は日本語のなかゝら浮かび上った水アカのごときものである。随っていくらでも創造し得るが、やはり伝統のものには水あかとてコクがあるようである。とくとがん味されたい。なおインテリジェンスのあるアカ（共産党）の隠語も興味があり、紹介しようかとも考えたが、下手に使って迷惑をおよぼしてはこちらのブが立たぬと思い、割愛した。終りに隠語もまた、恋の道程にもスイな利用価値があるということも、つけ加えておきましょう

刑事

あか（マッチ、火事）あごとり（取調べ、聞込み）あて（犯行器具）あみ（非常線）いたばしら（窃盗）いね師（詐欺師）うたう（自白）送り（刑務所行き）おしこみ（強盗）がいしゃ（被害者）角兵衛（変装）がさ（家宅捜査）かせびそ（売春婦）かたい（強情に否認）がちゃ（制服巡査）かつあげ（恐喝）かまい者（前科者）かんたん師（枕探し）ぎる（ゴマかす）くいつき（密告者）くもにかける（強盗が家人をしばる）げんじる（下見、様子をみる）ころし（殺人）ごそう（盗品運搬）三枚もの（三人共犯）しけ（失敗）七七（放火）しのび（夜間窃盗）面通し（犯人かどうか被害者にみせる）しょつぱい（悪い）白河（黙唖）ずや（常習故売者）ずらをきる（逃げる）そうめん（捕縄）たな師（万引者）ためられる（調べられる）たれだす（白状する）づく（感づく）天切り（土蔵の屋根を破って盗む）どさ（賭博の手入れ）土地かん（犯行地の事情をよく知っている）ながし（転々と場所をかえての犯行）なま師（現金専門の窃盗）のび（窃盗）なし割り（盗品によって犯人を割り出す）入浴（強盗）はいだし（恐喝）はいゆう（板の間専門）ぱちんこ（拳銃）ふける（逃げる）ぶんぶん師（街頭サギ師）むすめ師（土蔵破り）れつ（共犯）チャリンコ（少年スリ）ほし（犯人）

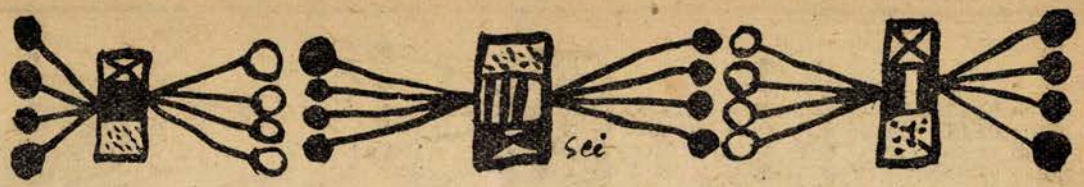
スリ

あてかける（切る）いたち（俊敏な刑事）色まん（金時計）おしどり（二人共謀）おどる（さわぐ被害者）大箱（汽車）かんべい（鞄切り）きりこみ（駅の改札口）げこ（劇場）しろく（刑務所）尺大（スリがねらった被害者）づかれる（気づかれる）だいもん（現金以外の物品）高町師（盛り場専門）だるま外し（混雑中に羽織をする）ちがい（行きちがってスル）こつちん（駅）なげし解き（女の帯切り）なげ師（女をスル）りんずかん（時計スリの一種）なす（財布）につか（質屋）ばあ（ポケット）はこ師（乗物専門）はたつから（乗降の際スル）ばんこ（派出所）まんじゅう（懐中時計）もさし（スリ常習者）くちいわや（刑事）

香具師（てきや）

あおた（無料）あらめん（初対面）あんばこ（留置場）一六（質屋）丹太郎（貞操観念のない女）おけら（一文なし）おとしまえ（話をつけてたかる）おやひげ（警察署長）おんと（無銭飲食）かげま（男娼）からみ（関係あり）きせる（無賃乗車の一種）きりもく（きざみ煙草）ぐれん隊（不良団）くり公（巡査）こどはり（街頭賭博）さくら（客にまじった仲間）猿回し（看守）さんばち（ヤミ屋）じけ（刑事）しま（縄ばり）すけでん（伝すけ賭博）つめる（指を切って謝る）でつちる（なぐる）てんがい（香具師）とうくろ（玄人）とうしろ（素人）とおす（話をつける）とんぼ（流しの刑事）ねたばる（発売）ばいにん（商売人）八百世円（ヤミ師）早乗り（横領）病院（刑務所）ほんめし（仁義をきる）丸公（取締り）やあさん（てき屋の親分）やごろ（刃物のけんか）かみなり（検挙にふみこまれた）ろうす（仁義）はぢき（拳銃）しやり（飯）長しやり（うどん）

小児科
内科
平尾醫院
大阪市南区日本橋筋二ノ七〇
電話 戎一六四三番



川柳塔

尼崎市　水谷鮎美

あけつぱなしのシラノの鼻をおもふ晝
鼻ふとく太く感じて鼻つまむ
病気届にお酒がすこしこぼれ
浮気する部屋に闘魚の陽にひかり
忍び足うつかり猫の腹を踏み

池田市　戸田古方

末社の末社で知られている本社
思想しているのに障子はんなはれ
非理法権天正直すぎました

大阪市　西尾栞

逃げ腰で四十の恋をしてるなり
税務署と言えばシャツクリ止まつたり
卒業をすれば〳〵と母一人

大阪市　市場沒食子

百万円待命首をさしのべる

大阪も積雪

雪かいなもう呑む腹で休む腹
持てぬ性これもやつぱり親ゆづり
ダンスでも習おと五十過ぎた身で
歳は歳だけの素顔となり寂し
女うよ〳〵夫を貸して下さいな

淀遞信病院川柳会「ほろ〳〵同人」誌へ

うれしさはこゝにも伸びた柳の芽

横浜市　福田山雨楼

この辺でノアの洪水あつてよし
値上りの事実へ女房負けていず
不眠症貨物列車が威圧する

ホノル、市内藤草一郎

騙されてからはさゝえの様に閉じ
満ち足りた寢顔内緣気にもせず
倦怠期添ひ寢の肩の寒いこと
それからのプランをステツプ踏みながら
無い奴が酒地肉林とぬかしたり
お流れをエヘヘと頭の上で受け

米子市　三鴨美笑

さよならの手をふる子らは一年生

ホノル、市白砂旋風

寄附をして臭れというのが新車で来
感傷に耽る間もなし空の旅

布施市　吉田水車

とろろこぶ足蹴にかけて出来上り
借りる気で行けば土地だのふしんだの
京の春君にはいとど短くて

大阪市　須崎豆秋

恐ろしや火鉢へ点火するマツチ
鮒は鮒だけがかたまつて冬の池

大阪市　正本水客

里十九さんに

名優のマスクのように眼をつむり
エプロンのままの家出はたかが知れ
年若いかつぎ屋どうし何か食べ
鞄から毛糸を出して恋とおく
耳そうじ逃げる体制ととのえて
電話口おんなぐるつと向きを変え
返すとも返せとも云わぬ金のたか

大阪市　丸尾潮花

きうくつな傘で駅まで送られる
青い眼のカメラのなかに立つ舞妓
弟子ごろりけいこ場に寢て夢もなし
噂とは別なとこから嫁をとり

奈良県　尾崎方正

芋虫のやうに歩いて行くオーバ
横文字の雜誌かゝえて狹く生き

大阪市　武部香林

大物は疑獄庶民は詐欺で生き
卒業の嬉し涙とゆうを知り
きつちりと月賦拂うて花も見ず
足の向く方へと詩人霧に消え
大いなる油断わが子の行狀記
見送りの妓は地味なものを着て
頼母子のからくり家を疊むなり

出雲市　尼綠之助

卒業へうれしい波濤がのしかゝり
気の毒なごみも出て来る時節柄

下関市　弘津柳慶

一泊の恐縮たばこまで貰い
噂をすれば来た〳〵〳〵とうれしがり

鳥取市　杉谷湖山

そんな金あればたのしい夢ばかり
自己批判酒に敗けたと思う日や
拔け作と言われ五人の子を育て

宇部市　国弘半休

前任のこゝにも球根忘れてゐ
是非借りて帰えると女の図太い手

大阪市　吉田斜水

入試パス維持費がさきの幼稚園
冷藏庫が要る政界の腐敗振り
報復手段襖を破る兒となりぬ
麗人とはかくも冷たきものなるか

大阪市　山口秋花

暖かくなれば高貴も出歩いて
旅疲れわが家の疊古くとも
我もかく老いる日のある席を立ち

吹田市　野本呑水

独身の夢持つ女医に診てもらい
調剤の女医指図する夕支度
妻病みて野菜の高いことを知り

大阪市　渡辺孫拙

東海道ツバメ返しでかせぎ出し
入学の願がけはやる袖も出来

大阪市　冨岡淡舟

あきまへんやろかと借金気が弱し
へつらわぬ気性を皆に見込まれる
子の手をばしつかと握る花の駅

奈良県　飯降白香

しのびなきロマンチックな夢をもち

奈良県　西辻竹青

お茶席へハイヤーで来る老社長
一号活字戰果の様に疑獄記事

宇部市　長野井蛙

転住の感想
椅子心地どうだに嬉しい友の筆
汗泌みた紙幣は二円の釣もとり

貧故に妻心にもない嘘を言い

布施市　森下愛論

貧乏も愉し孝行な子が居つて

岡山県　直原七面山

奥様に紹介しろとアプレの娘
口程に女教師ちつともすれていず
詩集手に恋をさゝやく若さ欲し
美人看護婦嫉妬の中で強く生き
恋人がありますのよと短大出
恋人を授けて呉れと初詣
男みな阿呆に見える女子大出
夫婦喧嘩へ停電と言う仲裁者
我が恋となれば女優も口ごもり
妻逝きし家の空虛をもて余し
僕も又都会のあぶくどぶざらい
長女出生天然パーマであわてさせ
親父から一杯飲もうも花見時
後添へなびく弟が悪らしく
風呂の中で子と合唱も春なれや
台風へ富士巍然たり〳〵

大阪市　西森花村

鶏賣つた鶏小屋早速子等遊び
色どりは料理の本の通り出来
エレベーター押し込められてお辞儀され
映画なら日延べするとこ引導鐘
気の若い母に娘はダシにされ
春を呼ぶ唄へ吾が兒も輪になつて
酎でさえ金のないこと忘れさせ

眞つ直ぐに戻らし酒が買つてなし

兵庫県　田代尋四

押の手が足らず彼女に逃げられた
行き先を言えば愚妻は安心し

東京都　藤本満年

新婚は風の吹く日も散歩に出
桃の軸かけて春呼ぶことにする
押賣りのように手相見手を握り

岡山県　福島鉄兒

アラヨイショ〳〵と下戸も負けて居ず
愛してるなどと今更あほらしゆて

東京都　藤本茶々

高い靴下虫に喰わしてようはかず
神経痛そろ〳〵初老といわれそう
美辞麗句親美同志も気を使い

牧方市　塩浜一路

入院の一夜ホテルとは違い
酒を絶ち煙草を絶つた白い部屋
忘られた病人今日も呼吸する
力弱く病人同志慰めて

岡山市　服部十九平

花街行くのに眼帶とマスクかけ
座長だけ炬燵に寢せて旅役者
今の子は煙を吐かぬ汽車を描き
大学と言うバーのあり文京区
金貸しの娘に生まれたのを悩み

岡山県　大森娯句樂

プラットで歩巾を替えてまだ送り
すき燒へ後の一人が気を揉ませ

尾崎市　長谷川三司

酒飲まぬ事が卑屈にさへ見える　清荒神

なに様と聞かれて困る月參り　兵庫県　若林草右

つまり疲れが出たのですと老医
禿げたのが大將らしい坐りよう　高知市　大西迷窓

誕生日を別れた女が知つてゐた
花花よ女房の声も春めいて　下関市　石川侃流洞

紙芝居大人は斜の方へ立ち
叩き賣もう意地になる太い声
風邪引いて粥の白さが淋しい日
風邪引いて去年のマスクさがすなり　大阪市　安岡珊枝郎

かるしゆむあると骨までしやぶらされ　広島県　山田季贅

待ち呆け結局寒い目にも合い
退院を待つてる様に櫻咲き　大阪市　山本葉光

四月馬鹿吃りの嘘に引つかゝり
国訛り出して警官訊いてやり
雑談を愉しむ春の夜の酒
集金へ遊んでる子が留守と言う
待たされる電話にジャズが聞えてる
三味線を習い浮気を封じる気　倉敷市　木村千容

七光り蔭口言えぬ義理があり
オートバイ蔬菜講習受けにくる
割り切つてものをいうので敵が出来　倉敷市　田垣方大

酔眼の奥を見つめるワイフの目
新婚の夢にひたれぬ計算器　石川県　那谷光郎

勝手な嘘言える政治の国に住み
スターなればこその若さが自家用車
縁の端かつぎ屋に貸し馴染なり
汽車賃は聞くだけ聞いてまだ行かず
名女形幕が下りればグロに見え　石川県　野村味平

雪が来て岩魚の味をなつかしみ　大阪市　木村水堂

雛飾してもうつらぬ家に住み
長女もう父の養子を知つて居り　堺市　八木摩天郎

案の定金借る爲めの長居かや
履歴書も反故になつたまゝ四月　高槻市　福田丁路

入学の秘訣の傳授頼まれる
いとし子が春に目ざめた顔になり
税務署で悲壯な顔をいたわられ　倉敷市　水谷谷水

機関紙を敷いてデモの娘等の晝
囲われてなを流し目の癖すてず
鮮人の妻になりきり振り向かず
気の毒な人だと言うにもうやいて　倉敷市　椙原一善

なに事ととへば貴夫の誕生日
春の窓開けつ放して琴の音　岡山県　田村藤波

欺さねばならぬ今宵の厚化粧　岡山県　岡田夜潮

出の悪いペンを障子にふりつける
口笛で帰つて妻に挙手の礼
お節句の心を親は親で持ち
釣忍残して我が家明け渡し　岡山県　政田大介

パパさんと妓に呼ばれる歳になり
爪染めて針もつすべを忘れてた
鈍感にみえて取るものだけは取り
税務吏の美談が派手な記事になり
初恋の人が闇屋になつていた
達筆で一気に書いた借用書
鈍感な方ねと女燃えて居り　岡山県　岡村牛耕

脊伸びするように遮断機上つとり
お掃除が趣味で姑嫌われる　茨木市　下山清潮

後学の爲めとか裁判聞かされる
へそくりもようせず妻のふける事　岡山県　本田惠二朗

淋しさに宿の亭主と話し込み　大阪市　眞鍋一瓢

裏町も春は来てゐる水溜り
酔うてゐるけれどかつての秀才さ
六人の飯チョロ〳〵の瓦斯で出来　京都市　松川杜的

伊豆は佳しあんこが手を振り手を振つて
エプロンの白さ大大阪の水に馴れ　大阪市　永田六龍子

割勘へ無遠慮に箸急がしく
倉敷市　日置文郷

降る雨に山陰人として馴れる
オベッカが効いて轉勤せずに済み
一票の過ち今頃表れて
大阪市　佐野白水

六甲で滑る写眞え社を休み
銀婚の旅へ今から積立てる
大阪府　小池しげお

合オーバーになつて社長も若くなり
ハンチング脱げばちよつびり禿げており
見晴しでベッタの人を待つてやる
倉敷市　松村万古

父うさんがベストテンかと冷やかされ
気が合うて地金のままのおつきあい
困つたら何時でも来いと言うたのに
言訳は予定ばかりを並べたて
石段が銀杏の影を千々に折り
倉敷市　藤井春日

三味の胴はぢけたまゝで二昔
また目刺かと小悴ブイと立ち
ノーブルなとこが好きよとおだてられ
大阪市　木口賀峰

居眠りをしても給料くれる椅子
出勤の早い部長に気がつかれ
大阪の近くにこんな麦の出来
故郷へは帰らぬと云う姉藝者
弱法師眼を閉ぢたまゝ舞いおさめ
岡山県　岡本緣風子

元も子も無くして廣告詐欺気づき
十代の性書いつしか夜が白み
花見ずし空見ては巻き見ては巻き
留守番を頼む花見のすしも巻き
岡山市　津田麦太楼

拂い物結局女房また仕舞い
水引も熨斗も剝げとる小抽斗
パ、さんが抱けばがくんと兒の頭
おびんずる俺によう似た佛さま
ビル街をコセ〳〵〳〵と人通る
米子市　小西雄々

別れる気火鉢をつゝきながら聞く
洋裁のもう百姓に嫁がぬ気
十代のいつしか風呂が長くなり
岡山県　浜野奇童

一等車皆役得の顔で坐し
卒業を前に
皆んながするから僕もサイン帳
巣立ちゆく子等へだるまを言いふくめ
吹田市　橋本幸男

療養へ妻もマスクで合いにくる
立呑みも覚え場末の行狀記
堺市　高崎雄声

長屋の喧嘩持つてる方へ味方をし
客途切れコツク表で腰をのし
線路へだてて新年の御挨拶
岡山県　三枝一策

誤診とは云はず余病にして殺し
悪友の煽てるまゝに落選し
ネクタイを結んでもろた顔はせず
大阪市　森文夫

煙草ひろい未だにたへぬ世をなげき
大阪市　吾郷玲人

先生と呼ばれし人の市場籠
傳言板平次も解けぬような文字
中風を起き上らせた差押え
役得と言う名を妻は怖く聞き
岡山県　岡田青果

いつ来でも警察ぬくいとこでなし
釣書へ臨時雇だとは書かず
競輪に行く日鶏より先に起き
息だけをしとる米壽の置炬燵
大阪市　若本多久志

忠魂碑かくなり果てた世に残り
住吉さん一ケ所だけへあげておき
逢いに行くネクタイがある二十代
かくしやくとして駅長のタブレット
すきだらけ女欺されそうに生き
末つ子が大学までの身をいとい
掌を合す友の頼みはきいてやり
岡山県　光好三四詩

誰か来ぬかなアと二度目の欠伸をし
子は哀れ親の虚栄にさいなまれ
親しさは台所から上り込み
言訳など聞かぬ手錠へ涙ぐみ

同舟近詠

鯛提げてやあ〳〵と来る島の友
船ばくちさくらとさくら喧嘩もし
松山市　前田伍健

祭日四方山話

清水白柳子　麻生梨里
福田丁路　小池しげお
司会　戸田古方

古方＝お忙しい所を有難う。四月の終りから五月にかけて非常に祭日が多いのでこう言う話題を選びました。川柳を通じて或は川柳家として、昔の祭日、今の祭日というものをどう考えるかお話し願います。処で今の日本に祭日と云うものがありますかなあ。

丁路＝終戦後は祭日が無くなつて、国民祝日と云う様に呼ばれていますね。

白柳子＝大体祭日と云う言葉自体が、今としてはおかしいと思います。私が考えている祭日は、終戦前の神武天皇祭、秋季皇霊祭と云つた祭日が本当の祭日であつて、今の祭日は「何何の日」と云う風に表わされているので、祭日という概念から、違いのでは無いかと思います。

梨里＝大体祭と云うものは、民族的に盛り上つて自然に出来るもので、そう云う点から言つて終戦後の祭日は確かに人工的な不自然さを感じます。

しげお＝私はいずれも肯定致します。しかし、昔の祭日、今の祭日、夫れ等の名前は変つていますが、簡単に考えていずれも祭日としてサラリーマンは休みが頂けるので、名称はどうあろうと、多い方が結構ですね。

古方＝その適例として最近、紀元節復活の問題が出て居りますが、賛成と反対の言分を見ますと、不確実な一年の或日を紀元節、建国の日として取り上げる事は良くないと云うし、一方は、どつちみち、大昔の事だからハツキリ判る筈が無いから、個人に誕生日がある様に国の誕生日を定め様と云う二つの議論にあつて、サラリーマンは理窟はどうあろうとも、矢張紀元節復活に賛成する人が多い様です。

梨里＝紀元節と云えば、矢張り民族的の祭日です。こう云う意味で、紀元節は、適当な祭日と思います。小さく云えば地方的なお祭りとか行事と云うものは、その地方の気候とその地方の事情、例えば比較的、農業の閑な時季であるとかそういうところから、何時か自然に確定的に定まつて来たものであろうと思います。だから大きく云えば国家の此の祭日も国全体のこうした意味で生まれたもので今日や昨日に定められたものでもないし、また五人や十人や百人の人達によつて定められたものでもないと思う。昔から何代も何代もの年月を経て何万とも知れぬ人達によつて自然に、確定的に、なつたのでは無いかと思います。

しげお＝大賛成です。戦後出来た「勤労感謝の日」は、新嘗祭と云つて、百姓の精魂こめたお米をお供えするお祭りでしたが、今日は「勤労感謝の日」と云つても百姓の一番忙しい時季に当つているから、休むと云う事は出来ないし、「感謝の日」の文字に矛盾を認めるのです。

牛も休め今日は勤労感謝の日

青竹

梨里＝この勤労感謝の日などは、昔からあつた祭日には違いありませんが、何のためにそう云う名に変えられたか、非常に他の祭日の中でも一番不自然な名称であると思います。昔のように「新しく取れたお米をお供えする祭典」と云う意味であれば、これはお百姓さんは勿論の事、国民全体としても意義のある日だと思います。しかし、この勤労感謝と云う意味が非常にあいまいで、働ける事を感謝するのか、働いている人に感謝するのか、或は昔の新嘗祭に関聯を持つて「お米を作られたお百姓さんの勤労に感謝する日」と云う意味に解釈するなら、何んのために、お米を作つて貰つて、消費する側の、お役人や、サラリーマンが、会社を休んで、遊びに行くのか、この祭日そのものは、矢張り、先程云つた意味での民族的に出来た祭日には違いないのですが、その名称を変える必要がなかつたのでは無いでしょうか。終戦後お役人が何か新らしがつて、勝手に変えたと云う様な感じがして、国民感情にピッタリとこない。まあ国民全体から云えば、大多数が、そう考えているのでは無いかと思う。

丁路＝昔の新嘗祭は、気候もよし天気もよし、国民全体がノンビリと其の日を祝福したのでありますが、今は我々の様に百姓をアルバイトにしている者は、その日を祝福するどころか、却つて勤労の日として汗を流している次第です。ことに十一月廿三日頃と云えば農家にとつては、猫の手も借りたい位に忙しく大事な時期でありますから、私の地方では休むと云う事はなく、収穫が済みますと特に良く稔つた稲を選んで刈入れに使つた鎌を一升桝と共にかまどの上に飾りお灯明を上げて今年も無事に穫り入れが終つた事を神に報告し、そして尚その際何処の家庭でも新穀でおはぎを造つて近所へも配る習慣があります。昔は一升桝一杯位もある大きなものを特別に一つ作つて、それを主人が一人で全部喰べたそうです。おはぎを造ることは疲労の時に甘いものを要求する生理的現象に依るものと思われます。

古方＝新嘗祭と勤労感謝の日が「牛も休めの句」を、ひつかけにして話題になつて来ていますが、勤労感謝の日と云うと、単にお百姓だけに感謝する新穀感謝祭、或は感謝の日と云うのでなくて全勤労者への感謝の日になつている。その日を休んで遠足、ピクニックに出かけるサラリーマン氏も、自分を自分に感謝している事になつている、云わば、日本製のメーデーとも云つて良いでしょう。結局は、働らく者が、働く事を喜び同時に、他人に働いて貰つた事をば、喜こぶ日が勤労感謝の日の意味の様に思われます。

梨里＝それでしたら、なぜ新嘗祭の日に制定したのかしら。

古方＝秋に勤労感謝の日を持つて来たと云う事は、従来あつた所謂新嘗祭との関聯が無い訳ではありません。近代産業以来、日本も農

民以外の勤労者の数がウンと殖えたと言いながら、全体とすれば農業労働者の数が多い事と、あらゆる日本人が、お米を喰べて生活しているところから、お米が穫れるこの秋の時季に日本製メーデーが定められ、しかも、終戦後といえども、残存した天皇制との関係もあつて、昔なじみの新嘗祭がお化粧変えしたのでしよう。

梨里＝それならそう云う事にして置きます。

古方さんは私より大分アプレで（笑声）中々新しいですなあ。

古方＝いやあ、ええこと云うてくれはる。（笑声）

しげお＝「牛の句」の牛が可哀想ですよ。

丁路＝今皆さんから、農民に対し理解あるお言葉を頂き、百姓している者の一人として、感謝します。しかし、我々が精一杯、百姓仕事に励んでいる時やく訳ではありませんがアベックなどがハイキングの途すがら、我々の百姓姿を感謝するどころか、さげすむ様な目つきで通る者もあり、無精に腹の立つ事もあります。

白柳子＝大体私等の仕事から考えますと五月には所謂祭日と云う名の休みが月始めに、塊つているのが変な様に感じられます。

古方＝それで先も私十一月のお祭りに日本製のメーデーと云いました。

白柳子＝昔は私等の休みと云いますと、十日戎、神武天皇祭をドンタクと云つて休み、五月の節句、それから天神祭、位までは休みが無かつたものです。

しげお＝そうでしようなあ……

白柳子＝五月一日のメーデーは正式の祭日として認められているのですか。

しげお＝組合の力に依つて、会社としては、休日として認めさせています。

丁路＝私達学校に於てもメーデーに参加する事は自由なのです。組合本部からも全員の参加を通知されますし、吾々も働く者としてそれが望ましいのです。然しその日が休日で無い限り問題があるので、吾々公務員は微妙な立場に置かれているわけです。こうした関係からして私の方では非公式に組合幹部が参加しています。

共嫁ぎ今日メーデーの肩を組み

しげお

丁路＝日本のメーデーは遺憾ながら紛糾が多い様ですが、メーデーのメーを明とでも考えて文化日本にふさわしい意義ある日とし、働く者の喜びを謳歌したいものです。

新緑のパークへ続く勞働歌

丁路

古方＝確かに終戦すぐ後のメーデーは解放された明るさがありましたね。今日の主題の祭日と云うのは、国旗を立てる、立てないに拘らず、民族或は国民としての行事でありまして、感謝をする日もあり、共に反省する日もあり又共に喜ぶ日であり度いと思います。

白柳子＝五月三日の憲法発布の日が祭日になつておりますが、現在の憲法そのものに喜びを感じ、その日を祝福すると云つた気持で休んでいる人が果して、どれ程あるかと考へますネ。

古方＝靖国神社のお祭と云うのが、昔はありました。戦争の酣の頃には毎年新顔を仲間に入れるために、真暗にして大層なお祭が行なわれ、其実況放送が放送されていましたが、其時には彼方からも、此方からもすゝり泣く声が聞えて居ましたが、一夜明けると、大変賑にお祭があつた様に聞いています。今憲法発布の日の話が出ましたが、その日の事を忘れては困るが、拘わり過ぎても困ります。四角四面に長話を聞されたりするのでは、何んのための祭日と云う名のお休みやら判りません。七月十四日は仏蘭西のバリー祭、仏の大革命の勃発記念日です写真で見たり、話に聴いたりするバリー祭は仏蘭西人が、心から楽しんでいる様に見えます。そして、ちよつぴりではあるが、自分達の手で、自由を手に入れた日の事を、忘れていないでしよう。所謂今日の主題の祭日とはこんなものでしよう。

白柳子＝五月と云う月は、サラリーマンにとつて、非常にうれしいでしような。四月廿九日の天皇誕生日が休みで一日隔ててメーデー、二日が日曜で三日が祭日、五日と休みの連続ですね。私等仕事をしているものからみれば「天国」ですなあ……。

梨里＝だから、お役人が決めた祭日だつて云いたいのですわ。間で一日、二日ばかりの有給休暇をとると一週間ばかりは連続で休めますから、温泉へでもと云う処でしようか。

しげお＝それ程でもありませんよ。二十五日が給料日で、この休中に買物にも買がねばならんし、金が続きません。それに休んだら給料が減ります。次の月にこたえる訳ですネ。労基法で年休、日曜、それから祭日と、休みがありますが、憲法で最低生活を保証して呉れ、労基法で休ませて呉れるのは結構ですが、即収入に、ひびいて別にうれしいとは思いませんね。

勞基法通りて金子が殘るかい

木声

梨里＝それは贅沢です。（笑声）天は二物を与えずつてね。

古方＝生徒は喜びますがネ……先生は四月に始めた授業が、レールに乗りかけた時に故障、停電のようにガタビシやられると、ノートが進まず、大弱りです。

白柳子＝言い方も色々あるもんですなア。我々働いているものの休みと云う感じと、古方さんの様に精神的な仕事をしている方とは、一様に行きません。今生徒の話が出ましたが、五月五日は「子供の日」でこれは昔から、端午の節句と云うて休んだのですが。

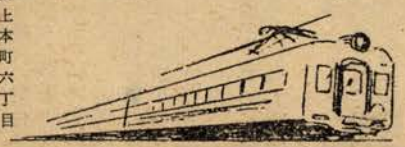
大阪・名古屋・宇治山田を結ぶ

近鉄特急！

大阪—名古屋 2時間55分
大阪—宇治山田 2時間
名古屋—宇治山田 1時間42分

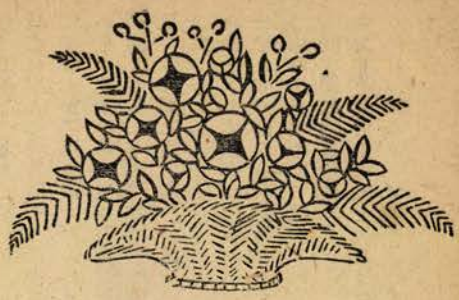
大阪上六発	7.40	8.40	11.40
	14.40	16.40	18.40
名古屋発	8.00	9.00	12.00
	15.00	17.00	19.00
宇治山田発	8.50	9.50	12.50
	15.50	17.50	19.50

座席指定特急券5日前から近鉄案内所で発売



近畿日本鉄道

大阪市天王寺区上本町六丁目



秋春筆雑

最後に求めるもの

三條東洋樹

先日或る人が訪ねて来られて、「某会社の人達に川柳を勧める話をする事に成つたのだが、どのように言つて川柳の道へお誘いしたものか、よい智慧があれば教えて頂きたい」と云う相談を受けた。私はいつも川柳の話をする時は、相手を見て、それ相応の説法をするので、全然相手もわからず、どんな機縁からそんな話をしに行くようになつたのか、その事情も分らないこの突然の相談には、突嗟によい考えも浮ばなかつた。保険の勧誘なら、保険会社にはそれ〴〵特長を箇条書きにした印刷物の用意があるだろうが、川柳を保険の様に勧誘に行つた話を余り聞いた事がないので、恐らくどこの川柳社にも、川柳への勧誘書など用意の有る筈がない。それで舅余の一策として、つい数日前N・H・Kから放送した「女性と川柳」に書いた一節を引用して、

若し相手が女性であつたなら、従来ビジネスとして何の興味も持てなかつた仕事、たとえば洗濯や炊事にさえも、

まな板の前後に転ぶ胡瓜もみ

と云う風に、一つの興味を発見する事が出来て今更の如く自分の周囲なり、自分の生活が楽しく豊かになる。…と云う風に話を進めては如何ですか。若し相手が酒や麻雀の好きそうな人が多い時には…と、即席に川柳の徳を考えながら、常識が広くなる、人情味が出来る、性格が明るくなる、酒色賭博等の迷を追わない等々の話をして帰つて貰つたのであるが、後で考えてみると、如何にこの様な功利的な条件を並べてみても、空念仏と一緒で最も大切なものが欠けて居るように思えてならなかつた。局外者なら兎も角、私自身、この様な功利的な川柳の徳を並べられて、今更の如く川柳へ随喜の涙を流し合掌する気持には成れないのが事実である。然らばその最も大切なものとは何であろうか。いろ〳〵と考えを深めてゆくうちに、川柳する事によつて、自己の人間性にプラスするものが無ければならない、と云う点に落ちつくように思つた。

川柳は人間である（紋太）川柳は人間探求の詩である（水府）川柳は人間陶冶の詩である（路郎）

この三人の秀れた先覚の言葉は、それ〴〵に肯けるのであるが、今の私の一番先れたいのは最後の言葉である。

神五題

福田山雨楼

女性が出産の時の苦痛を一手に引受けて相手の男性がこの苦しみを分担しないと云う法はない、夫婦は一心同体であるべきはずなのにこれでは余りに片手落である、と女房連中が相談の結果このことを神様に陳情することになつた。能弁な女どもにまくし立てられた神様は、なるほどお前達の云う通りだ、早速改めて男達にも陣痛のくるしみを知らせるようにしてやろう、と実行を約束された。ほどなくある家で出産が始まり細君は難産で大変な苦しみよう、然るに亭主の方はと見ると何の痛みもなくけろりとしている。神様の約束も当てにならないと女どもがいきまいていると、どうしたことか隣家の神主が先刻から七転八倒の苦しみをしている。それもそのはず、神主と密通してできた子だつたのである。女どもはまた相談をし直して、神様のところへおそるおそる願下げに行つた。

これは西洋の昔話。

土木技師のベテランS氏はクリスチャンであつた。酒も煙草もやらない、貞淑な細君以外の女は見向きもしない。品行方正、清廉潔白、一銭の浪費もしなかつた。ただささやかなおごりと云えば、役所から支給される文具類の中、尻ッ尾にゴムのついた鉛筆と、部厚なメモ用はぎ取り紙だけは、常に新しいものを欠かされなかつた。電話がかかつて来た場合書取るのに便利なからである。昭和のはじめ役人を退められたが、それからの清貧振りには神々しいものさえ感じられた。そのS氏にたつた一つ癒らぬ癖があつた。それは他人の欠点や短所を見抜く鋭い眼が悪口となつて表われることだつた。自己を守ること厳なだけ他人の不注意や怠慢が許せなかつたのであろう。S氏は既に天国で安らかに眠つていられる。

東大名誉教授永井潜博士は

「神の前に人間は一切平等だと宣言されるにもかかわらず、真理

古方＝何んで、三月三日、娘の日とせなんだのですか。

梨里＝それですよ。五月五日の男の子の日を、祭日としているのに、三月三日の女の場合は、休まない。そう云う点でも、この祭日の決め方がおかしい。それは、あまり祭日が多くなるので両方を代表して、五月五日の男の節句だけを祭日にしたのか知りませんが、そこらあたりは、まだまだ男尊女卑の傾向がありますね。

古方＝私が定めるのなら子供の日は、四月四日にするのやがなア……。

しげお＝梨里ちゃん、執念深いですなア。旧暦の三月は、五月時分に来るので、辛抱してやつて下さい。

丁路＝今女性の日が無い事を攻議されましたが、我々川柳人によつて、当局に女性の日の制定を陳情しては、どうかと思います。

古方＝その日は母の日を公式の祝祭日にしたらどうです。こんな句がありますよ。

子が炊事母母の日に氣が疲れ　独仙

母の日の母へおしつこひつかける　ただみ

母の日は何日でしたかね。

梨里＝五月の第二日曜でしよう。

古方＝世界的の祭日でしたネ。その反対にこゝに、あわれを止めたるは父の日です。

白柳子＝そんな日がありましたのですか。

梨里＝アメリカでは、行われている様ですが、私はそんな必要は無いと思います。母の日を除いたら、後の三百六十四日は父の日じゃ無いのですか。

のために真理を明らかにし、正義のために正義を曲げなかつた偉大なる学者、志士を始めとして、数十万の生靈が、横暴極りない宗教裁判所の名において、生きながらやき殺されるのを、神はなぜ冷然としてみそなわすのか。宗教家はこれみな神に背いた罰だというであろう。しからば試みに問わん。過去において恐るべき流行病が、数千万の無ゴの生靈を倒したのを始めとして、原子核理論の誤れる応用によつて、一秒間の百万分の一秒において数十百万の罪なき人の子をやき殺し、さらに進んでは、全地球を一死塊たらしめんとする危機さえはらまんとしているのを、全知全能の神様は、なぜおしかりになり、お戒めにならないのか」

とのべていられる。自分はこの一章を読み更にビキニ島で行われた原子爆弾の実験の偉大なる効果を聞いて、俄然無神論者に転向した。永井博士が云われるように「要するに神は、人間を超越して存在するのでなく、全く人間の心の中にあるのである。心のエッセンスによつてつくられたる至高至善の理念、これすなわち神なのである」と思うようになつた。

無神論ときめたがわれのちつぼけさを　山雨楼

K氏は大の信心家であつた。毎月一日、十五日には必ず神社仏閣に早朝からお詣りして、清々しい気持で役所に出勤された。中学を優秀な成績で卒業した秀才型、頭脳明晰、意志堅固で仲々の手腕家であつた。従つて上司の覚えもよく将来が嘱望されていた。そのK氏が四十幾つかの働き盛り、日支事変の頃、折からの汚職事件に連座して裁判の結果何がしかの刑を受け免職。恩給、退職賜金を棒に振つてしまつた。九ジンの功を一キに欠いだ類である。お守札なども、しこたま袋に入れて身につけていたが、神様も居心地がよいと時々居眠をされるらしい。

F氏はさる有名な御社に奉仕する身分で考証家としても知られており、川柳にも興味を寄せていた。神主ではないが大きな社務所の一隅で主として文筆の仕事をしていた。そのF氏が柳友のH氏から秘蔵の末摘花を借用した。ほんの一寸見せて貰いたいと云うのでH氏は貸したのだが、十日、一ト月とたつても返さない。梅が桜の頃となつても音沙汰がない、たまりかねたH氏が書面で催促しても反響がない。流石温厚なH氏もとうとう怒つてしまつた。某日H氏は自分のところへ寄つて「これからFのところへ本を取りに行くのだ、居催促をしても必ず取つて来る」とカンカンになつていた。

勿論神様のあずかり知られぬところであつた。

BK放送川柳

課題「卒業」　西尾　栞選

佳作

佐賀県　ほりけんじ

卒業へ愚師は風邪をひいたまゝ

伊勢津市　鈴木美恵一

クラークの言葉をかりて送られる

大阪府　横倉富久一

卒業の訓辞へみんなよい子なり

愛知県　新海　吐平

卒業の後でしらした生みの親

貝塚市　津田　千舟

花嫁学校を出て嫁き後れ

米子市　由井　富郎

卒業の美談をすみに地方版

香川県　三豊　赫子

卒業の蔭に母ありミシン踏む

大阪市　丹波　太路

卒業の理想に遠き職に就き

兵庫県　吉原　紅月

卒業が近くマルクス主義をすて

福岡県　中村　乱雲

小学校だけで愚師を招ぶ出世

徳島県　宮本　末男

就職難の記事が大きい卒業期

神戸市　高橋　博子

卒業の日までかくした母の無理

姫路市　悟出句の坊

手を受けて待つ卒業に義理があり

松阪市　万濃　修

卒業へ子の夢父の母の夢

京都市　小山　梅夫

卒業をじつと見送る時計台

入賞第三席

愛知県　藤井芳草子

卒業式理想の高い答辞する

入賞第二席

大阪市　鳥居眞壽夫

卒業をさせるまではと若々し

入賞第一席

新発田市　岡島　玉八

卒業の日の朝刊も配りに出

○

放送川柳は最近まで第二火曜の八時十五分から三十分までの時間に放送されていたので、サラリーマンなどは丁度出勤途中であつたりして、聴取することが出来ず、従つて投句もつい出さないようになつていたので、そのことを放送局に交渉したところ、第二土曜の六時三十分から四十五分に放送するように改められたので、今後揮つて投句されたい。

しげお＝父の日も母の日も、云わず、老人の日が、ありますから、あきらめて下さい。

丁路＝父の日、母の日と云つて限定をすると、未婚の人から、また叱られはしませんか。

白柳子＝それで成人の日が、あるのではありませんか。

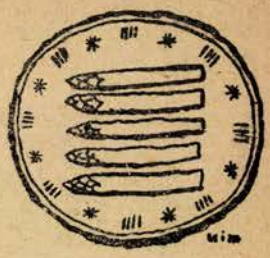
梨里＝大体祭日と云うものは、休日として喜こばれる丈で特にその日を意義あるものとして、感じている人が一般には尠い様です。川柳に祭日の句が殆んど見られ無いと云うのも、その表われではないかと思います。まア日曜と大した変りが無く日曜以外に休めるので儲けものだなア…と云うようなところじやないかと思いますネ…。

古方＝それでは、この辺で有難う御座いました。（摩天郎筆記）

川柳雑誌社特製
投句用　柳　箋
一冊（五十枚綴）三〇円
送料八円

鳴門　観潮
神戸からクーポン580円
深田からクーポン470円
大阪（難波）からクーポン700円

関西汽船



川柳 ストレプトマイシン

北川春巣

一、前書き

ペニシリンについで、第二の抗生物質として世に出たのが、ストレプト・マイシンである。略してストマイと云い、単にマイシンとも云う。ストマイは土壌微生物の中の放線菌属の一種が作り出す代謝産物で（ペニシリンは青かびの代謝産物）一九四三年ワクスマン氏等によつて発見され、一九四四年に第一回発表が行われた。我が国に渡来したのは、勿論終戦後（一九四五年）で、ペニシリンが球菌に対して抗菌作用あるに対し、ストマイは結核菌（委しくはグラム陰性棒菌）に対して抗菌作用があるのである。我が国に入つて来た時は、これでもう結核は根絶するかのように思われて、今から考えると嘘のような高値を呼んだものである。一本（一瓦、注射一回又は二回分）数千円で、それも密輸入が多く、密輸船が到着した時には多少下落するが、船が入らぬとなれば、ブローカーに頼んでおいて、数千円を投じても中々手には入らぬのであつた。国産の大量製産が行われている現在の二十倍、三十倍もの価格で、然もそれが当時の貨幣価値での数千円であるから、その一本だけを注射するにしても、余程のブルジョワでない限り不可能のことに属していたが、それも一本や二本では駄目で、少くとも四十本の注射が必要であると聞かされては、我々貧乏国民には高嶺の花だと思われていた。然し現在では値段も安くなつたし、健康保険にも採用されて、必要な病状の被保険者には只でしてもらえるのであるから、有難いことで、ストマイのために生命の助かつた人はどの位あるか数知れないのである。結核の死亡率が半減し、年間結核による死亡者数が、今迄長年に亘つて第一位を占めていたのが、近年脳卒中に第一位を譲つて第二位に転落したのもストマイのためであると云える。所がストマイの入つて来た初期には、数本位の注射で、あれ程劇的に効いていたのが、近頃は四十本を注射しても充分でないような例を多く見るようになつた。これは一つには、注射を続けて行くうちに菌がストマイに対して耐性を獲得することにもよるが、もう一つは、初めからストマイの効かぬと分り切つた症例にも、患者の方からせがまれて注射するために、効果が現われぬのもあるであろう。菌が耐性を持つと云うことは恐ろしいことで、色々の方法でこれを防いではいるが、絶対に完全と云うわけには行かぬらしい。我国の健保ではストマイ四十本迄は認めているが、米国では百本やれの百二十本やれの、と云つている。そうなれば一クールに、長きは一年を要し、耐性菌の出現も一層多くなつて来るものと思われる。

ストマイの働きは、菌の発育を阻止するだけでなく、殺菌の作用もあると云われるが、人体内に於ては菌を殺す所までは行かぬらしい。

ストマイの使用法は、主に注射（筋肉内注射）で、脳膜炎には脊髄腔内にも、気管支結核には気管支内にも注入を行い、急を要する場合には静脈内注射もするが、これはあく迄も従である。内服するのは赤痢その他の腸炎の場合であるが、これもそう度々使うことはない。結核でストマイを使つて悪いと云う場合はないが、前にも述べたように、ストマイを使つても効果のない状態はあるわけで、そんな場合にはストマイ使用は無意味である。痛い目をし損であるだけならよいが、若し耐性菌でも出来れば、将来ストマイが是非必要な状態に立至つた場合、効かぬと云うような悲惨な事も起るので、そんな状態の場合には使わぬ方がよいのである。

副作用として、眩暈、耳鳴が起ることがあり、難聴又は聾になることもあるが、実際に必要な場合には、生命と取り替つこである場合もあり、止むを得ないであろう。ストマイによる難聴は、現在の所、治す術はないと云われている。

二、ストマイの川柳

ストマイは結核の特効薬で、一回一瓦（一本）宛、或は半瓦宛、毎日注射、又は一回一瓦宛、週二回注射、と云うふうに、全量四十瓦（四十本）になる迄注射し続けるのであるから、ストマイを詠んだ川柳は結核斗病者の手になるものが多い。そして一般の人々には分り難い句もあろうと思うので、こゝに挙げる句が必ずしも全部名句ではないが聯か医学的解説を試みることにしよう。

平熱になつてマイシン痛いこと　富多葉

昔は結核の熱に対しては、的確に効く薬がなかつた。（腸チフスもそうだつた。）何日も何十日も絶対安静で、向うさんが下熱してくれる迄待つているより手がなかつたのである。所が現在では、ストマイと云う有力な武器があるのだ。然も急に高熱を出すような病型の結核には、マイシンが非常によく効く、二、三本の注射で下つてしまう場合もある。然し注射を始めたからには、四十本をしてしまうのが定石で、たとえ菌を殺してしまうことは出来なくても、徹底的に菌を打ちのめしてやるのがよいのであつて、途中で止めない方がよいと云うことになつている。人間は勝手なもので、熱のあるうちは注射を痛いとも思わぬが、もう平熱になつてしまえば注射が痛いし、途中で止めて欲しいとさえ思う。四十本の注射をし終るには、注射の仕方によつても違うが、大体三ヶ月から五ヶ月はかゝるのだ。それで此の句は実に巧みに人間の心理を詠み出してあると思う。医者として、患者のこんな声を聞けば同情心も起るのであるが、心を鬼にして注射をし続ける。その心は実は「仏」なのだ。「鬼手仏心」と云う言葉があるように……。

ストマイを健保でやれる有難さ　喜代子

ストマイ四十本を自費で打つとすれば、約三万円程になる。現在の貨幣価値にした所で、一般人にとつては大変である。そこに健保

の有難味があるのであつて、作者は心から健保に感謝しているのである。健保は平素掛金をしているのだから、使わなきや損だ。ストマイであれ、何であれやつてくれるのが当然だ、と感謝一つせぬ患者の多い中に、こんな句を作つて健保に感謝している人の心情は、医者の方から云えばこれ又当然であるとは云え、現代の人々には文字通り「有難い」人であると云える。

ストマイで腸結核もすしが喰え　喜代子

此の句も同じ作者の句である。ストマイでたとえ熱はすぐに下つても肺の病変はレントゲンで見て中々よくならないが、腸結核は妙に早くよくなるのである。その他喉頭結核もストマイで実によく治る。従つて腸結核や喉頭結核はストマイの適応症である。腸結核のために今迄腹が痛んだり下痢をしたりして、食物は流動物しか通らなかつたのが、ストマイのおかげでいつか粥も許され、普通食さえ食べられるようになつた。おすしも試験的に食べて見たが、何の悪影響もなかつた。その美味かつたこと！　女の好物の「すし」を持つて来て、その喜びを現わした所、句に女心がよく詠まれている。

ストマイでやつとこれだけ肥えました　恵女

肺結核患者は、その九五％以上に腸結核を合併していると云われている。たとえ下痢や腹痛は訴えなくても、無症状の腸結核と云うものが存在するのだ。但しこんな人は、肥えないのみか次第に痩せて来る。肺結核の患者が痩せるのは、主として合併している腸結核のためであると云われる。従つてストマイによつて、無症状の腸結核が治つて来ると、体重の増加となつて現われる。患者自身はそんなことゝは知らないが、太つて来るのを喜んでいるのである。これもストマイの句として頂けると思う。

ストマイが効いて来たのか腹が減る　達人

此の句もストマイによつて、今迄進まなかつた食慾が、進んで来たことを喜んでいるのである。腹が減らぬと云うことは不愉快なもので、我々も正月の餅をふんだんに食べた後などに経験する所で、よくヂアスターゼを服んだりするのであるが、此の句は患者自身、体内で如何なる薬理作用が行われているかは知らぬまゝ、たゞ表面に現われた食慾の増進と云う現象を喜んでいるもので、やがて此の患者も、前の句の患者のように肥えて来る喜びを味わうに違いない。

ストマイの効果写眞に見えはじめ　凡尙

前に述べたように、ストマイ注射を行えば、目に見えて熱は下り食慾も出て、体重も増えるのであるが、その効果がレントゲン写真に現われて、浸潤像が消失するのは中々なのである。二、三ヶ月して写真を撮つて見て、多少陰影が消えたかな、と思う位であり、或は陰影の状態は殆んど変らないが、医者は患者を安心させんがために、「少しよくなつたかな。」など、患者に話す。患者自身も永い斗病生活者は、もう素人ではなく半玄人と云う所だから、写真の陰影の多少位は分るのであつて、自分で見てもよくなつたのは分るのである。此の句もストマイの効き方をよく詠んであると思う。

ストマイにかける期待の大き過ぎ　一石

ストマイの痛さの中に希望持ち　幸枝

マイシンで冗談云えるようになり　湖秋

マイシンですよと優しい看護婦さん　光月

第一句は、特効薬と云われるストマイを使つて欲しいのであるが、医者は前に述べたようなことを云つて、中々注射してくれない。所が今度いよ〳〵注射して貰らえるようになつたので、大きな期待を持つている、と云うのである。然しこんな場合はえてしてあまり期待甲斐のないことが多いものである。

第二句は、ストマイのおかげで熱も平熱になり、すしも食べられるようになつたが、注射の痛みは益々つのるばかり、然しその痛みの中にも希望を持ち続けている、と云うのである。或は痛いがために、それだけ希望が大きい、とも云い得る。

第三句は、ストマイで熱も下り、下痢も止り、やつと冗談も云えるようになつて来た喜びを句にしたものである。見舞の人におどけて、びつくりされた口であろう。

第四句は、入院患者の所へ、痛いストマイ注射に廻つて来た看護婦をスケッチしたものである。此のストマイをブドー糖注射に置き替えたのでは、感じが丸で違うだけでなく、或は全く句にならない。

ストマイを打つ看護婦へ尻を向け　歳嘲

ストマイは筋肉内注射が原則で、回数も何十回としなければならないので、お尻へするのが普通である。腕（上膊）の筋肉内でもよいわけであるが、こんなに沢山を腕へすることは無理である上に、痛みも強い。臀筋は痛みも最も少く、多量にやるのにもつて来いだ。此の句は、注射をしてくれる恩人（？）の看護婦にくるりつと尻をまくつた、と云うその場のスケッチであるが、ユーモアが溢れている。

ストマイだジヅドだ息子金がいり　雅巣

此の作者は病人ではない。昔からどら息子はよく金を使うので通つているが、此の息子は、ストマイやジヅドと云う方面へ金のいる、病弱なブルジョワのぼん〳〵である。どこかに古川柳のような味のある句だ。ジヅドとは「イソニコチン酸ハイドラジヅド」のことで、これも最近米国から来た結核の特効薬の名である。現在国産の量産も行われて、値段も比較的安価であるが、耐性菌の出現が最も早いと云われている。

同じ作者の句に、

ストマイを打つて娘の美しゝ

と云うのがある。「美人薄命」と云うような意味で、想は新しくはないが、美人の真白なお尻へ注射する光景などを思い浮べると、多少のエロ味も感ぜられぬこともない。

三、結び

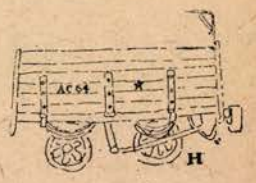
ペニシリンに始まつた抗生物質の発見、研究も二十世紀の後半に入つて、第六番目の抗生物質たるアイロタイシンの発見にまで進んで来ている。抗生物質はもう医者だけでなく、一般人の常識であると云える。殊にストマイの知識など、料理、育児などの知識と同様に嫁入道具の一つとして花嫁学校の教科にあつてもよいように思うのは、筆者の我田引水的の考えであろうか。若しそう云うことになれば、その後の生活上或は育児上の便宜は此の上ないものと考えられる。そんな意味でわたくしは、次の句を以て本稿の結びとする。

ストマイの知識も持つた嫁が來る　春巣

近作柳樽

路郎選

エプロンで来て値切るのを恥とせず　兵庫県　吉原　紅月
飲振りは無力な男とは見えず　同
酒くせが出世の道をまた閉ざし　同
日傭にしては名前が立派すぎ　同
エプロンの白さ男を寄せつけず　同
才媛と云われ冷たい女なり　同
気の利かぬ女中が妻に皆喋り　同
轉勤へ恋の仕末を持ち込まれ　同
轉勤で危い首を助けられ　同
台所の不便はつきり嫁は言い　岡山市　宗高ハツ茶
七輪の火を無駄にして自炊食べ　同
辛抱して呉れる養子はちと足らず　同
敗残者道義に厚い人だつた　同
お婆さんを見舞えば濕気た菓子を呉れ　同
何となく歩く人出が春にする　同
月明りはゞかるようにボート漕ぎ　同
ぼて腹を妓にチョイとくすぐられ　兵庫県　酒井ひか平
丹前は三階さんと知れる継　同
お行儀も物かわ恋に酔ひ痴れて　同
しなやかな指を女に見せたがり　同
男臭い部屋ねと窓を開けられる　同
手傳うて貰うて賣値を間違われ　同
停年の当座大工の眞似もやり　同
アルバイトする子親爺は碁に耽り　福岡市　岩田十三楼
正直の会社思いで平社員　同
性は善借衣で酒によう酔はず　同
三の糸つぐ三味線え花吹雪　同
住持今日庶民としてのヘルメット　同
床づれの母に仕へて嫁きおくれ　大阪市　谷　一平
くどく気のかき料理とも知らず食ひ　同
里に来て春の若芽を食べる幸　同
姑へ仕へた皺が目立つてき　同
残雪へ風邪引きそうなお雛様　同
心経を誦して泌み〳〵常ならず　京都市　松下京一楼
こんな藥でも飲ませたかつた生前　同
商談のつゞき電車へ持つて乗る　同
垣根から何をお植ゑかとは日曜　同
ほくろの毛引張る孫が可愛くて　同
気をつけて行けよ担ぎ屋同士なり　大阪市　不二田三夫
言うことに―好きで担ぎ屋してまへん　同
一年生だぶつく服が捕虜のよう　同
二度目というひけ目妻だけ負わされる　同
焼跡の土藏に寡婦がひとり住み　同
夫婦とも福祉事業所の世話になり　貝塚市　津田　千舟
差し入れの味に料亭なつかしみ　同
お互いに相手が出来ている離婚　同
をでん屋もパーマネントへ老舗閉じ　同
講談の髪は烏の濡羽色　同
税金を納めて気抜けして帰り　岡山県　永松東岸子
声だけで女房小間物屋とわかり　同
きき合せ刑事の様な事も聞き　同
初勤め雑巾馬穴を教えられ　同



川柳時評（二）

藤本満年

世はまさに疑獄時代である。毎日の新聞も、ラジオのニュースも、汚職、汚職の出て来ぬことはない。経済保全会をはじめ、類似金融機関の贈賄的献金をはじめ、造船、陸運両疑獄はどこまで発展するか、見当もつかぬほどである。政界の腐敗、官界の腐敗、国民は全く、眼も耳も、おゝいたくなるようだ。献金か、贈賄か、バラ撒かれた黄金を受けた代議士は、自由党に百四十数名、改進党に六十余名、右社に数名、左社にも一名ぐらいあるだろうと、政界雀の噂ばなしは喧ましい。それが単なる噂か、真実に近い話かは、検察陣のメスの冴え如何にかゝることで、国民は片唾を呑んでその結果を見守っているという形である。しかし、汚職時代を痛憤する一般大衆の声とは反対に、汚職さま〳〵という商売もないではない。

差入れ屋汚職ばやりを歓迎し

なのである。名士、高官ともなれば、拘置所に入つても贅沢な差入

草野球相手の選手一人借り　同
貧しさがよけい淋しい年の暮　岡山県　田淵　紫笑
カルタ取る指にもあの方触れて来て　同
恋人が来て正月に張りがあり　同
少うしは妬いても欲しいらしい夫　同
新婚の宿へまぶしい窓を明け　同
ささやかな恋Bランチそれでよし　大阪市　安井　蜂呂
カメラは楽し恋人をしげ〳〵と　同
大穴へカメラ最高裁の役　同
株式課守衛が名義換えに来る　同
マーケット抜けてそれから立話　同
警官と並んで歩く懐手　岡山県　田淵　笑鬼
月給をはつきり言わぬ婿養子　同
姉婿とゆつくり話す姉の留守　同
窓越しに火事を見ている長じゆん　同
大雪もかまわず借金とりが来る　同
不精者では通用をせぬ日へあわて　愛媛県　村上　旭童
子に愚痴る外に能なき母に老け　同
まけさせる気がゆつくり椅子へかも　同
墓碑ずらり貴賤貧富のそのまゝに　同
利用されながら心服しています　同
金策に来たでも無いに冷たい眼　石川県　福田　卓風
参観日教師親にも授業の気　同
身の上にほろりとなつてかたられる　同
長生きでラジオも聞けぬ耳となり　同
褒めてたに急にくさすは振られたが　同
片田舎「何んでも修理」とは面白い　和歌山県　金子一軒屋
司会者の役得美人を前にして　同
丸に「質」だけだが看板よく目立ち　同

現実は乙女の愛など容赦せず　同
空想を宣傳カーにけちらされ　大阪　安井　久子
残業へ冬の三日月きびしすぎ　同
湯タンポへ猫もう先に長うなり　同
草月流鋏だけでは手にをえず　同
金のいることに話題を替えられる　愛知県　岩川　寛虚
両親のほれた養子の堅いこと　同
神童と云う子を親はもてあまし　同
市場籠さげて非番の老巡査　同
正月が二度来る村の平和なり　奈良県　野中　稔一
檀家から帰る尼僧は梅を持ち　同
雞鳴いて読経も声をはり上げる　同
命日を知つて居るのは母ばかり　同
早春を友入院と云う便り　同
祕書してるお蔭一等車にも乗れ　岡山県　大塚美能留
退院へ離婚が待つて居ようとは　同
正直な妻でへそくりまだ出来ず　同
大物の素質女中に子を産まし　同
逆境へ僅かな事も気にさわり　岡山県　小林　夢介
ピクニック壽司は子供がみんな喰べ　同
道楽だ趣味だと父子もめて居り　同
結局は廣告代は客が出し　同
二代目は螢光灯で簿記をつけ　大阪市　本多　省三
いゝ頭すぎて失業まだつゞき　同
整理案二号チョッピリ口を入れ　同
孝行のつもり入院させられる　同
キアバレーへ拂うと知らず国の父　和歌山市　秋月　宏方
思い出は拜み倒して買つたいも　同
茶羽織を着ると奥さん玄人めき　同

れがある。ぬく〳〵としたラクダの毛布敷枚に包まれて、それこそ別荘に起居するという状態である。もとより、拘置所である以上は、行動の自由は束縛され、広々とした青畳の上に眠るということはあり得ないが、事件の関係者や、多数の部下が、高級車を連ねて、続々と差入れに来るのである。東京小菅の拘置所は、時ならぬ高級車の陳列会ともなるということである。さらに驚くことは、

差入れへ綺麗どころが列をなし

ということである。けれど、そも〳〵こんどの事件なるものは、いずれも、料亭における饗応からはじまつている。東京赤坂の料亭が、天下の脚光を浴び、美妓秀駒が、世の羨望を浴び、事件の渦中に明滅しているのである。国会行政監理委員会の証人として登場した森脇将光の、いわゆる森脇メモによると、お客三人の座敷へ、芸妓十五名以上がはべり、五人のお客へ四十五人の芸者が招ばれていることもある。お客の一人が拘置所入りともなれば、綺麗どころの行列も、ムベなるかなというところであろう。

秀駒は芸なき名妓と謳われる

こんどの造船疑獄で、天下の名妓と謳われた赤坂の秀駒は、昭和電工事件の日野原被告の愛姿秀駒とは同名異人ということである。今

村役場まだ大將の書をかゝげ　同
泰三が僕の気持も画いてくれ　貝塚市
三坪でも客間と居間にしてみたく　榎本　靜德
やけくそのように交通笛をふき　同
十ほどもちがう女房に叱られて　同
陽溜りの中に老父の耳掃除　宇部市
平凡な妻を見直す說教座　上林　粗影
悔る事なく五十の恋を打明ける　同

安川久留美氏へ

宿痾とは淋し琥珀のいろよ色　同
教授法下手で組合書記となり　今治市
斬捨てる勇気を首相持つて居す　長野　文庫
藥草屋にこきおろされるペニシリン　同
何時見ても投資相談欄强気　同
三味線屋明治以来の店構え　姫路市
眞知子卷娼婦のチビたハイヒール　難波　愁夢
看護婦のマスク僅かに眼丈け出し　同
子のしつこ鷄を呼び犬を呼び　同
老境の佗しきものにオルゴール　出雲市
春光が滲みてオーバーの重いこと　同
しまい風呂屈託もなくシヤボン塗る　同
発車間も無いに天井熱う出来　同
儲からぬ愚痴も置いてゝ玉子賣り　松坂市
もらい物借り物軍備出来上り　同
口ごもり結局天気ほめただけ　同
絶景へ齒の浮くようなバスガール　同
「平凡」も読んではたちに近くなり　滋賀県
損して得とれとは父の社交術　同
失恋をしたことにして三十過ぎ　同

全集はアクセサリーで買うただけ　同
ハイ僕は健康だけがとりえです　吹田市
つけ馬もおなかがすいたあべのはし　梶川　蘇堂
名も知らぬ小鳥早出の道に鳴き　同
銀座裏何恐れんや貸與服　同
動物がやたらに出て来る学藝会　岡山県
色足袋の赤さ後家ではほつとけず　梶尾　節子
修身のような学校の紙芝居　同
駅長か挙手の礼した一等車　同
あれで子が三人もあるパリーモード　大阪市
どうしても母と云わない子に悩み　高田　一夫
拂わないのぢやない拂いきれぬ税　同

卒業式

優等は洗いざらしの服着た子　同
俺も年彼岸参りの誘いが来　吹田市
曲乘りをしてあほんだら溝へ落ち　菊田いさむ
隣組しぶちんがいて寄附がもめ　同
ペンギンも暖冬異変でちと困り　同
女教員服が合わない様ふとり　岡山県
先生に負けない様に禿げており　太田　又州
阿呆らしくなつた時分に一つ釣れ　同
釣れませんネエと見物感心し　同
消防車今日は稽古に行くらしい　京都市
週刊とサンデーを買い名古屋まで　堀口　欣一
局長の室に似顔と桃の花　同
媚かなしもう愛情をつなぎ得ず　岡山県
水をさす隙もあたえず結婚し　小原　宇柳
台所改善此処に窓が要り　同
世智辛い世に待命とは気のながい　大阪市
増本　翠露

年二十才、花も恥らう美人ともいわれるが、女学校出ということも彼女の格を上げている。芸者に出てから約二年、三味も踊りも、芸にかけては全くの素人で、お嬢さんタイプが珍重がられての人気となつたようだ。何んとか代議士に思われ、山下汽船の会長、社長らのヒイキとやらが、売れッ妓の名声を博する最大の原因ともいわれている。一株十万円との噂もあるが、何の株かは、想像ご勝手次第、取引は腕次第ということにいたしておこう

造船へつぎ込む税を高う取り

こんどの疑獄は、国民の血税を船会社へつぎ込んだことが最も重大な問題である。単に公金を少々費い込んだとか、会社の金を重役がごまかしたという問題とは違つて、疑獄の背景となつた船会社への国庫補助が問題なのである。船会社はタダ儲け、国民は何も知らずに、あくせく働いた膏血を絞られているということが問題なのであるが、船会社への国庫補助は、何のオトガメもなく、補助金をもらう運動費が、贈収賄の容疑をうけているにすぎないのである。

腹這いになつたその日の土俵入り

横綱は堂々たる土俵入りをした、丁度その日、惨めな腹這いになつて一敗地にまみれた。横綱の権威いずくにありといいたくなる。し

クラス会来ぬのは死んだことにされ　同
本妻に見せたいとある嚴島　同
クリームだけと言う女患にある匂　和歌山県　久保田青竹
附添へ甘える癖がついて癒え　同
母もいる散歩みんなで嬉しがり　同
停年を祝うにうちの小いさ過ぎ　広島市　御戸　凡平
割勘へ無理にも下戸のちよこを上げ　同
催促のない借金が首を締め　同
街錄も投書も汚職憤り　米子市　勝田　正郎
商魂は新聞にさえ鍔をつけ　同
肉卵食わせ一人子なお肥えず　同
誘うごと嘲けるごとく妓座し　津山市　檀原伊佐武
美容体操どうのこうのと老妻が　同
ネオンまで付けた銀行貸しもせず　同
金釦着て新入社かしこまり　西宮市　小浜　牧人
我か影と語り孤独も亦たのし　同
気が付けばびんのあたりに見る初老　同
青く青く春待つボート塗られて居　大阪市　早川　野甫
汚職聞く千円さえも借れぬ身に　同
暗闇に人がいて犬ぎよつとする　同
嫁かぬのに子供のほしい年になり　大阪市　宮崎　貴代
うそだつた彼の言葉を承知せず　同
なんとなく好きなのですと云つて置き　同
親しめるプリンス僕と同じ歳　広島市　藤川　幻詩
貸切りのバス眠そうな顔ばかり　同
勿体をつけて我流を教えられ　同
あの柄にするわと財布あてにされ　岡山市　矢田笑気坊
ラブレター母の意見も一寸書き　同
情熱も燃やさず婦長トウがたち　同

レグホンの多情へ妻はさからわず　金沢市　滝田　柾風
封印の金庫水仙靜かなり　同
草原に台だけ残る忠魂碑　同
入院の妻に月賦があつたのか　大阪市　金井　文秋
手相見は弱者と見たか俺を呼び　同
年不惑嘘をそのまゝ聞くとする　同
寄附が主で顧問と言う字かぶせられ　赤穂市　川西　去水
左馬では暮されぬ藝者族　同
株でやられ保全会で又やられ　同
約束の指切り女本気なり　神戸市　野村　初甫
女兒抱いて代々うちは養子です　同
税務署へ見せてやりたい此の疊　同
温泉も都会も知らぬ母のしわ　大和高田市　中谷川太郎
運命に馴れよれ〳〵の三つ揃　同
金持てば小新聞は賞めたがり　同
職業とすれば魚釣るのも苦し　高知市　岡本　元馬
義理などと言うてアブレに笑われる　同
差押えされた電話と知らず借り　同
旅に寢てやたらに寒い絹布團　玉野市　渡辺あきら
生神のように頼つた医者が死に　同
首にしたくせに妻子のことにふれ　同
少々は飲む人でもと脈があり　玉野市　迫田美婦適
結婚を済ませけろりと出勤し　同
画いている際に欠伸をするモデル　同
死別れ二号は矢張り外に置く　石川県　桑山　とよ
内職をしてまで二号ほれて居る　同
朝刊の小説へ女中立つたまゝ　同
アルバムに服着たかあちゃん見つけ出し　新潟県　高野　不二
花買つて帰る日もあり新世帯　同

かし、横綱という制度は、依然として、敗れてもなお格下げにはならない。政界の疑獄事件は、何んとなく、横綱の腹這いに共通したところがある。あれほど惨い事件を起し、政治史に一大汚点を印しながら、国会に多数を擁するということのために、「総辞職はいたしません」と大見栄を切つているのである。これでもし、次の選挙で、この政府が多数党となるようなことがあれば、国民の頭の方がどうかしているということになるかも知れない。

業力士業を封ずる業に漕い

業力士の対戦は、信夫山と若葉山、あるいは栃錦と若の花の勝負などを頭に浮べた一句であるが、造船、陸運疑獄の裏面に暗躍した猪股功という不思議な男をも想像することが出来る。この猪股という男のため、森脇メモの森脇将光もついに大金を借り取られて、策

山銀の瓶

大阪市大淀區長柄
西通一丁目四四
山銀硝子株式会社
電話堀川四四七番

春秋の区別ネクタイ変えるだけ　同
妻の怪我子に笑われる程案じ　大阪市　西川　惠風
日曜日母だけ起きて朝仕度　同
闘病の我れにも初日有難し　神戸市　小倉へとち

迎古稀

継ぎはぎの七十年の午の春　同
よき医者であつて夫がものたらず　玉野市　椎名ひさご
口下手が又税務署で損をする　同
観光バス只此の町へ土煙　岡山県　国正兼比羅
ガールフレンド嫁の気もちで母は見る　同
まゝごとになれば女の子が威張り　岡山県　片山　巷雨
押賣りは醜の御盾の成れの果　同
お見合か無暗にお茶と煙草なり　玉野市　古閑森行々子
人情に厚く上役出世せず　同
救急車運轉手だけ無表情　出雲市　坂本　竹馬
これでもか〳〵釣の日が暮れる　同
百円が落ちてゝ女中ためされる　貝塚市　芝原　洋史
親父より出世したのが運轉手　同
ぞんざいな口きいてゝも共に好き　倉敷市　野田素身郎
金のない時に櫻は見頃なり　同
アルバイトした詰襟で出勤し　和歌山県　西岡　春風
取れるだけ取つて危篤へ二号来ず　同
春や春患者が土手をのし歩き　貝塚市　小島さぎす
わが母校狭き入学率誇る　同
春うららうらら家出をしてしまい　大阪市　横田　方眠
住む家もないのに都会灯のあかし　同
柄にない遠慮がもとでデクにされ　大阪市　石居　高志
停年近く御情の支店長　同
デパートはんと今日もミナミで呑む係　大阪市　丹波　太路

白衣又新調をして街に立ち　同
見舞客代つて寝たい嘘を言い　出雲市　原　章坊
ユーモア劇場ワサビの切れた味となり　同
出しや張つたばかりに借金拂わされ　和歌山県　北平よし子
意見する父の口調に見える老　同
歌謡曲あの頃若さのあつた僕　今治市　越智　義夫
罪を悔ひ十字架胸に今日の幸　同
石鹸の泡懐かしむ病み上り　下関市　中村九呂平
ほろ酔の足に蛙が逃げそびれ　同
主婦として廃物までもすてさせず　大阪市　神谷凡九郎
忙しい女で他人の事に泣き　同
秀才でありむつつりやである彼氏　和歌山県　田中無津美
お互いに過去には触れず仲の良さ　同
看護婦の私服で来ればお茶もたて　岡山県　松島　不在
よく見れば看護婦顔が皆違い　同
学藝会母は樂屋に入りびたり　和歌山県　谷口喜久治
看護婦と並んで撮つて嫉かれてる　同
襟立てゝ今日は闇米見逃す気　尾道市　渡辺伊津志
朝風呂の慾得もなく雨を聞き　同
鶯の初音床屋の椅子で聞き　岡山県　国富　直人
遮断機が降りて散歩は向をかえ　同
へそくりもアツとゆう間のチンピヤララ　出雲市　佐藤　泰之
身は小菅されど思いは次期選挙　同
洋裁の灯へ宿題を訊きに来る　出雲市　原　独仙
風呂にゆく誇り坊やの逞ましく　同
十八九アクセサリーと云うマスク　大阪府　永田都詩子
どんな手が彈くかピアノが賣れてゆく　同
齒磨のくじでアメリカ夢みてる　鳥取市　北村　三歩

病院

孝行のまねごと

小池しげお

川柳雑誌三月号の巻頭に路郎先生の句帖白浜行を拝見して、成程うまいもんだなアと思つたのは私だけではあるまい、とりわけ身近に観賞した私は去る二月下旬両親と共に白浜で遊んだのである。

兄弟が揃うて父に逆らえり

という父と（それでも私は父と思つて居ます）

母だけが孤児の鉛筆買うてやり

という母と、そして二級酒とトリスを下げて

天王寺からもう白濱の客となり

二級酒てゆく白濱の御大盡

鼻の赤い父と、呑まぬ時におとなしい私、母と妻は二十円のチョコレートを成るべく減らないように子供に食べさしている、いともどかな風景であつた。

士策に溺れた結果となつたが、猪股もまた悪運か、幸運かは別として、ついに万策つきて、逮捕状を執行される運命となつた。猪股のためには、海運界も、陸運界も隠分引ずり廻わされて、大疑獄の原因を作つている。業力士は角界に限つたことではないらしい。

センベ下駄四十二番で預けられ　同
待命の金で二号を飼つてゐる　出雲市　原　一月
倦怠期妻パチンコのピース喫ひ　同
努力した甲斐あり首席に職が待つ　和歌山県　那須　栄久
決裂か妥協か吸殻林立し　同
御馳走が過ぎたのでせうと云う病気　滋賀県　土守トン坊
百姓のおかげ飯米だけは持ち　同
歯掻ゆうて又もソコソコシヤシヤリ出る　岡山県　熊見地久平
仲直りされて苦肉の策がバレ　同
親類をたよらぬ母の手内職　和歌山県　今井那智黒
旅の宿大きな蚊帳に俺一人　同
薄情の様だがこちらも火の車　倉敷市　岡野風の子
失恋をふさぎの虫と祖母案じ　同
ふられたかと思えばなんだ歯痛なり　貝塚市　福島　丁坊
歯科へ出るだけに女患は着飾つて　同
辞めるより辞めさす方が汗をかき　岡山県　佐々部　細佐志
後半生どうせ枯木の如く朽ち　同
香具師の鞭天が誅すと煙にまき　大阪市　石田　沐天
惜みなく愛をうばつてサヨーナラ　同
ピヤヌ・クイズ・ニュース・ダイヤル忙がしい　和歌山県　那須虎兒朗
内職の耳へクイズはボロすぎる　同
借金も拂えぬまゝに又姙み　岡山県　南部ひでを
貴方がするなら私もと浮気をし　同
情ない政治家汚職やつただけ　和歌山県　松本　竹外
問いつめば友情だけとうまく逃げ　同
嘘横丁なるほどうまい嘘をつき　大阪市　木村　十悟
知つて居る振りだけ見せた負惜しみ　同
紹介状竹馬の友と書いてくれ　鹿児島県　川端　柳風
流行歌忘れたとこで湯をあがり　同
駄菓子ではきかない一人子に育て　下関市　多田ほなみ
素面では帰らぬ夫にさせた椅子　同
もう春の音する橋で荷を休め　大和高田市　戸田　悦子
商賣をして泣きごとがうまくなり　同
酒呑んで叱られたいような春の宵　岡山市　小野花園子
春雨に濡れて帰りし徴税吏　同
入学の角帽を父冠つて見　尼崎市　眞野　逸風
バスガール櫻音頭も添えて見る　同
客足が少くなつて感謝デー　堺市　辻　圭水
旅費のない出張みんな譲りあい　同
ロマンスがぷつつり切れた入院日　大牟田市　福永　凡八
女患室見舞えば襟を直される　同
請求に行けば空屋になつて居た　倉敷市　長尾　越鳥
母の日と云うてもおれぬ台所　同
仲人の紋付少しやけた色　津山市　杉山　香平
吾が妻も白紙委任の端株　同

小谷選手を悼む

ジャンプした選手そのまゝ昇天し　兵庫県　酒井　甸士
友情もこの恋だけはゆづられず　岡山県　山本千恵美
寒空に誰を待つやら眞知子卷　兵庫県　寺山　喜天
説教も好きで無心も聞いてくれ　岡山県　山田ゆき江
せつなさは桟橋迄が近すぎる　岡山県　岡　一門
代筆で出せば病狀案じられ　和歌山県　津村　美子
処女奪いゴメンナサイの国に生き　岡山県　生眞　面目
白粉気ないグループに妻が居り　大阪府　森本黒天子
融通のきかぬ看護婦だけ残り　岡山県　清水　秋夫
心配をかける事だけ隠す仲　奈良県　菱田　満秋
卒業をろくにせずとも世に知られ　和歌山県　深田やよい
言葉までカクテルにするトニー谷　岡山県　池田　古心

車窓に写る夏みかんが紀州路の趣を添えてくれる

夏みかんにも紀ノ國屋きかされる

紀三井寺母は汽車から掌を合せ

道成寺、妻清姫に似ておらず

何時もより綺麗なはずの妻を凝視する

きつすぎる〳〵とてウイスキー

二級酒とウイスキーのハイボールも亦楽しからずや、そろ〳〵話の語尾にハ…ヒ…フ…ヘ…ホ…をつけて、

親と子が白濱行きの水入らず

おぢいちやんとお父さんと居て子を泣かし

酒の肴に泣かすのだから面白い。

白濱の驛員みんな男前

さすがに白浜はよい処である。しかし広告が大阪の至る処に出ているのであらゆるものが高い、金さ

にきびとり美顔水

トップ記事又も軍備にふれている　出雲市　平井　芳風
無器用も三男四女は育て上げ　岡山県　藤原　民徳
ウインドを買いたい息でくもらせる　和歌山県　辻　白星

肺切除の為入院

この肺を切りましようやとこもるすう　岐阜県　石神　古木
金のみが縁しをつなぐだけとなり　和歌山県　植田てる子
功成りて師恩を思う年になり　鹿児島県　近常　白峰
無器用もソロバンだけは指軽し　大阪市　三好　澄泉
母の日に父の炊事で寢とられず　岡山県　久安　自樂
胸を病みしかし私は金がある　広島県　山田スミ子
坐るにも思春期というしなを見せ　岡山県　宮田　竹坊
解除組勝手の違う立候補　神戸市　丸川愁電子
トヨペット島の櫻を見せ廻り　岡山県　田中　明
胸に花山門拜む京の街　石川県　石川素百々
入水の代役だつたエキストラ　熊本県　淵川　秀敏
毒藥を祕めて開拓する若さ　京都市　小林　亀一
脊廣着て自動車が来て退院し　和歌山県　三輪　夏雄
押賣は刑事の家と気もつかず　石川県　栗山　桃園
その事はと法規をめくる才をかい　愛媛県　横田　放人
囲むなと言わぬお医者に言訳す　西宮市　東浜　成子
エプロンに女ざかりを包みおり　岡山県　多田野保子
孝行はラジオに迄も気を遣ひ　大阪府　岡島　孤舟
MSA犬が尻尾を振る如し　宮崎市　野口卯之助
電話口うしろに母の眼が光り　山口県　岡本　鳥石
病床で母待つときの遅いこと　倉吉市　横山　宣昭
時間励行正直なのが一人いる　石川県　中松　一恒
嫁ぐ娘にだけは首きりかくして居　岡山市　西山　晴々
片肺の俺だ恋など欲しくとも　貝塚市　伏見　兒郎
いざ買うとなるとやつぱり着物たち　鳥取市　五百川ひろし

狭き門ここにも見える保育園　鳥取市　岩田八文錢
うたたねの子を疊からすくい上げ　岡山県　藤田　美雪
寒いやろと人にばつかり使いさせ　大阪市　中谷ハナ子
春風にオーバーのよごれ目立つて来　大阪市　池戸　桃村
交際をつゞけた税吏又変り　奈良県　木村　喜男
怒れる血喀いて「寅彦」想い出し　大阪市　半田　宏
入学のうれしさ語る新徽章　尼崎市　針重　白雨
入学ときいて子の丈見なおされ　尼崎市　船川　雅行
狭き門母裏口へ手を廻し　尼崎市　岸本　丹馬
入学の通知はあれどベッドなる　尼崎市　林　澄子
咲きほこる櫻まばゆし独り者　尼崎市　山本　貞男
政治より漫画を読めと見舞客　尼崎市　飯田　輝夫
地図の上なら日帰りも出来そうな　下関市　三谷　柳蛙
一人の子位に妻のヒスめいて　下関市　中土居　土筆坊
置く如く積む雪毛糸編み進む　下関市　向田妻楊子
孝子の碑冷めたき色に冬の雨　小倉市　今泉　銀町
もめ事が素面同志でこじれてき　下関市　藤田　蘇人
機関士の妻気にかかる汽笛なり　下関市　岡　藤四郎
客のない山の駅にも汽車止まり　下関市　宗貞　白馬
威勢よい汽笛漁港の朝が明け　下関市　吉村　一鶏
用件をなぐり書きして社長出る　下関市　山田いさお
老父母をつれて始発の客となり　下関市　重永戌理智
来客が俺の流したオーバーで来　岡山県　菅田　眞
パチンコに負けてる声だとげがある　貝塚市　坂口大三郎
旅先の土産父には出来すぎた　山口県　加川　成人
隙間風の様に女は坐り込み　大阪市　清水　望峰
早よ去ねと言はずラジオをかけたまゝ　池田市　太田　木声
老父母をつれて始発の客となり　下関市　玉野市　星川　陽石
身の上の話に酒がまずくなり　大阪市　藤村　梨花
たけり立つ若さを鼻であしらはれ

えあればもつとよい処だいうとさら〳〵くやしくなる。

ふところも知らず白濱愛想よし

金は無くとも白浜は変らない

安宿で寢ても白良の客は客

親に喜ばれるとうれしいものである小学校で優等をもらつて帰つた時もうれしかつた。

アカギレが治つたなどと湯を賞める

胃痛など忘れてしもた顔のしわ

等と喜んでくれる。

値切らずに温泉みやげ少し買い

然し吉田首相に耐乏生活を強いられている私達は未練を残して帰つて来た。

柳友圭三君の句に

あゝしんどかつたと温泉から帰り

私はあゝしんどかつたが財政に響いて尚更しんどかつた。けれども子として初めて親孝行のまねごとをした事を一人喜んでいる。妻へは孝行息子だと感謝しているらしいが私はしらない、それでもうれしいのである。

川柳第二教室 (1)

戸田古方

〔はじめのことば〕

これから川柳をはじめようという方、川柳を作りはじめたばかりの方のお役に立ちたいためこの講座がもうけられました。路郎先生をはじめ、先輩、先人のお許しをいただいてその高賢を拝借しながら講座をすゝめてゆくつもりです。なるべく具体的にと考えますので、皆様に作句していたゞいたのを材料にお話をすゝめて行きたいと思います。兼題は本稿のおわりにありますから応募を待つて居ります。

○ 入門の動機

柳誌を手にされている程の方は何かしら川柳に縁のある方々でしようが、それでもすゝめられてはじめて雑誌をよまれている方、又大にい川柳をつくつてやろうとはり切つていられる方もあると思います。それらの方々の御参考までに私が入門した頃のことを述べてみましよう。

昭和十三年七月、当時大阪松坂屋の七階にあつた趣味の道場、松坂クラブの川柳講座に出席した時がはじめです。指導は麻生路郎先生、すゝめて、つれていつて下さつたのは現在川柳雑誌社不朽洞会理事長中島生々庵氏です。不朽洞会とは路郎先生の門下生の作つている会です。

私は至つて血のめぐりのわるい方で、川柳といえば「しやれ」か奇智ぐらいに考えていましたので、とうてい駄目だとはじめは尻ごみしていましたが、出席してみて、路郎先生の個人指導をうけ、全くそんなものでないと知つたものですから、今日までつゞき、益々熱と興味を加えてまいりました。

○ 川柳とは何か

「十七音字中心の人生陶冶の詩である」と路郎先生は川柳生活五十年を通じて叫びつゞけていられます。俗間考えられている様な思いつきや、語呂合せではありません、趣味の世界とはいいながら、単なる遊びではないのです。

人生を批判し、社会を批判して自らを人間らしい人間に仕立てゝゆく道、しかも笑いのうちに楽しみながら修養してゆく、いゝ世界を築いてゆく道なのです。

川柳の味がほんとにわかつて下されば、川柳は必ず、老若を問わず一生あなたの道づれとなるものと信じます。

○私は何故川柳がすきなのか

私はかつて「川柳の徳」ということを個条書にしてみました。

一、物をよく観察するようになります。素材をつかむためにはつきりと二者の区別がつかねばなりません。

二、反省と自覚をうながします。観察は外から内に向つて、怒るのも馬鹿らしくなります。

三、お金と手間もかかりません。紙とエンピツ一本あればどこででも作句出来ます。

四、準備がいりません、川柳にはむつかしい約束がありませんから。

五、そして生活を豊かにし、人生を浄化します。

何か題が出ますと、その題をみつめます。例えば「鉄瓶」といえば「薬鑵」でも「きゆす」でも「土瓶」でもない。「鉄瓶」とはどんなものか、どこがどう似た他のものとちがうのか知らなければなりません。よく物を見ます。そのものゝ真髄をしらずしらず観察し研究するようになります。ものゝほんとうのすがたを見ているうちに赤裸々な自らの恥しい心もさらけ出してしまいます。反省が行われ、人生批判がなされます。同時にそれは社会批判の眼ともなります。諷刺詩といわれるのもそこです。

川柳を作句していると段々うそがつけなくなります。魂の麻痺を防ぎます。泣きながら慾望の波にもまれる。あらゆるものゝ真実を悟り、真実の宗教にふれて行けるような気がします。それは決して行きつまらず、きゆうくつでも、不自由でもありません。それどころか、川柳ぐらい自由なものはないのです。機に応じ申してゆきたいと思いますが、出発は標準型の十七音字でも、それにとらわれる必要はありません。用いることばも、表現の形式も、題材も、それがすぐれて価値のあるものであれば、各人各様、個性のおもむくままに、それにしたがえばよいのです。松坂クラブ時代クラブのメンバーがひとりひとりちがつた型の句をつくつていました。句主の名を見ないで誰の作品かいゝあてられるほどに育つてゆきました。

むつかしい約束はないのですから、川柳をはじめて作られる方は、先ず思つた通り十七音にことばをならべることからはじめられたらいゝのです。

川柳を「しやれ」や「奇智」と考えるのは川柳と狂句とまちがえている人々です。少くとも明治以後の川柳は明治以前の川柳のようなことばの遊びではなくなりました。昔の川柳にもいくらも美しい、すぐれたものが残つています。それらは目先の遊びでなく、人生の深いところにふれ、真実をつかんでいるからなのです。川柳に於ける詩があるからなのです。川柳は笑いの芸術ですが、それは上品な笑いでありたいと思います。ほんとうのものにぶつかつておれば、もつたいぶらず、しかつめらしくもなく、しかも題材の如何にかゝわらず、表現の如何にかゝわらず、知性と感性の適当な調和の上に立つて人を動かす力となるのです。それが今日の川柳のあり方なのです。

だから私は川柳がすきですきでたまらないのです。

川柳第二教室兼題

「酒」　五句以内

〆切　五月十五日限り

用紙　ハガキ

投句先　池田市井口堂　戸田古方　宛

平徳子

冨士野鞍馬

「平家物語」に

「その外、御女八人おはしき（中略）一人は后に立たせ給ふ。二十二にて皇子御誕生ありて、皇太子に立ち、位に即かせ給ひしかば、院号蒙らせ給ひて、建礼門院とぞ申しける」

とあり、この建礼門院が、清盛の二女徳子である。

承安元年（一一七一）十二月、十六才の時、四つ年下の高倉帝の后となつた。高倉帝は、治承四年（一一八〇）三月に御退位、上皇となられ、三才の皇子安徳帝が即位され、その翌年一月上皇は二十一才で崩御、その年十一月から建礼門院と称えたのであつた。

治承二年（一一七八）十一月十二日、徳子二十二才、六波羅池殿で皇子を御産。

御産の時には御殿の棟から甑（こしき）を轉がす儀式がある。男は南へ、女は北へ落すのであるが、この御産の時、甑を北へ落したが、また改めて南へ落した。それで、安徳帝は女じやないか！ということにもなつて、川柳はそれも詠んでいる。

安い徳故に甑も二度に投げ（タル一二二乙）

甑をば投げ直しても壇の浦（万宝七）

清盛の策謀で、実は女子であつたのを男子といつわり、無理に三才で帝位に即けたともいわれ、これも川柳は見逃さず

めゝつこをおちんこなどと二位の尼（万天六）

二位の尼裾を捉へて遊ばせる（万安三）

人の見ぬ方へ二位殿尿をやり（万明四）

めゝつこが出ると二位殿おつかくし（末初）

蜆貝海へかくした二位の尼（タル一六六）

よしつねは母をされたで娘（タル一〇六）

等と、男にゴマカシた狀景を想像して作つている。二位の尼は、清盛の正妻時子で、従二位だつたから「二位尼」といゝ、建礼門院の母、安徳帝の祖母にあたる。すつと壇の浦の最後までついていて、安徳帝を抱いて入水した。

こじつけの帝を船へ乘せ申し（拾五）

こじつけの帝を船へ乘せて逃げ（タル十八）

この傳説からいうと、安徳帝はコジツケにもなる。

「平家物語」には

「女院はこのありさまを見参らせ給ひて、今はかうとや思し召されけむ、御硯、御燒石、左右の御懐に入れて海に入らせ給ふを、渡辺の源五右馬の允眤（むつる）小船をつと漕ぎ寄せて、御髪（ぐし）を熊手にかけて引き上げ奉る」

こうして、建礼門院は生捕となり、義経の船にうつされたので、義経と情事があつたと傳えられている。それを詠んだ川柳は相当多く見られる。その時門院は二十九才、義経は二十七才であつた。

母の返報義経は門院を（タル一六六）

里十九逝く

▼里十九・永田賢次氏が腹膜炎を病み、三月二日午後六時十五分に布施市長堂の竹井病院で永眠されたことは痛惜に堪えない。行年五十九歳。▼氏は明治二十七年十一月二十三日に大阪市南区畳屋町六番地に生れ、同所で永らく食堂を経営されていたが戦禍に遇い、布施市に移られた。現在の自宅は布施市長堂二丁目二八番地。大阪市生野区の小路市場内に天麩羅の店を持ち、同市場の役員として重きをなしていた。性格は朗らかで親分肌だつた。親分の愛称のある所以。氏の浄瑠璃は堂に入つたもの。昭和三年五月、水谷鮎美氏が支部長であつた川柳雑誌社梅田支部に入り同五年五月川柳不朽洞会の会員となつた。昭和廿八年川雑新春句会へ顔を見せたのが最後であつた。

おやじさま里十九氏を偲ぶ

水谷鮎美

大阪のはいぬけの里十九さんを知つてからもう二十六年になります。昭和三年の春、夕鐘君を通じて川・雑梅田支部へ入会して頂き鮎美・夕鐘・観月・方眠・石竹のグループはそれからは親分々々と何事も相談しました「よつしや心配しな、まかしとき」と二つ返事に引受けて貰うてトントン拍手に支部は発展してゆきひとゝきは二十余名にも成りました。それからの十年余りは川雑の例会や宴会にはいつも出席されてその親分振りを発揮されてほんとうに人気がありました。昭和七年八月六日の本社納涼句会では新柳劇と銘を打つて「赤城颪」二場を演じて本舞台そつくりの国定忠次（里十九）勘助（華水）お花（かほる）浅太郎（二南）の配役で「勘助内の場」と「赤城山の場」で熱演され大受でした。花輪や声援で素晴らしい人気。その後は私とコンビで新春句会や師走大会に余興として

「沼津」　平作（里十九）重兵衛（鮎美）

「七段目」　平右衛門（里十九）おかる（鮎美）

「鈴ヶ森」　長兵衛（里十九）権八（鮎美）

「勧進帳」　弁慶（里十九）義経（竹荘）富樫（鮎美）

等を科白劇でつきあつて貰いその都度に芸談を聞かして頂きました。浄るりは「霊坂観音霊験記」や「野崎村」など最も得意でした。苦のない太つ肚の好人物でした終戦後は街にボスがはびこり悪名を流しましたので今までの親分の愛称は誤解があると云うので水車君と相談をして「おやじさま」と改称しました。相変らず川柳に

をし　（末　初）

義経の母常磐は清盛の妾になつたので、その娘を義経が…

源氏にすぐれてやさしきは門院　（タル六六）

草摺で疵門院のおうちもゝ　（〃一四九）

門院は入水のほかに濡れ給ひ　（〃一四二）

いきかけの駄賃門院やたらさせ　（〃　五三）

と濃厚なさまを想像し

建礼門院ぬれたまゝ御入水　（タル一六七）

これは前後を誤つて詠まれ

義経は船の中にてびろ〳〵し　（万明　三）

古来稀なる間男は壇の浦　（タル六七）

この情事は間男ではない

この体を梶原（仇名グジ〳〵）は、頼朝へ密告して、怒らせたので

門院をひつくりかへしたが落度　（末　四）

門院をしたとざんそうしちらかし　（〃　初）

門院を逆さにしたが落度なり　（タル五二）

門院をなめたでゲジに甜められる　（万天　五）

門院をあつためたのがおちどなり　（万安　四）

等と詠まれている。

門院は赤貝にでもなるところ　（万明　二）

平家の一門は入水して蟹になつたといわれているので、こんな句も作られている。

「源平盛衰記」に

「みずからは君主にまみえ奉りて后妃の位に備わりし上は、仮初の褄を重ぬべしとこそ思はず候ひしに、（中略）屋島をも源氏に追い落されて、一つ船の中の住居なりしかば、兄の宗盛に名を立つといふ聞にくき事を云ふをもまた九郎判官に生捕られて、心ならぬ仇名を立ちて候へば、畜生道に云ひなされたり。まことに女人の身ばかり申すにつけて悲しけれども、わが身一人の事にあらず、昔もためし候いければこそ。」

とあり、これによると、宗盛とも浮名が立つたようであり、義経との情交も肯定してある。それで後に、「大東闘話」や「壇浦決戰記」等に、おもしろく潤色されて傳えられているので、前のような川柳が作られたのであろう。

壇の浦の戰は、壽永四年（文治元・一一八五）三月であつたが、建礼門院は、それから京都へ送られ、五月一日に出家して「眞如覚」と法名して、落北大原の寂光院に清く過され、「平語」では、建久二年（一一九一）二月往生となつている。そうすると、三十五才が最後ということになるが、書物によつて、いろ〳〵になつていて、「盛衰記」では貞應三年、六十八才。「歴代皇紀」では建保三年、五十七才となつている。

京都の寂光院には、建礼門院の御影が残つている筈である。「平家物語」は、この「女院御往生の事」で終つている。

励んでいられましたがたしか昭和二十五年七月に生野区腹見町の小路市場が新設されたので開店され、後に市場の役員になられてから句会に遠ざかられました。昨年十一月病臥されお見舞にゆきましたが、こんなに早く亡くなられるとは思つておりませんでした。葬儀の三月四日は朝から早春の雨が降つていました。路郎先生・葭乃女史はじめ水客・紫香・愛論・竹荘・没食子夫人等と共に御霊に最後のお別れをしました。

悼

早春の雨のしづかに霊に哭く

里十九親分

須崎　豆秋

「ふら〳〵と二十年あれやこれやと二十年これは〳〵と二十年」

と言われているが夢裡さん里十九さんとこう相ついで亡くなられると同年輩の私にとつてはシミ〴〵「これはこれはと」の感を深くせざるを得ません。

里十九さんの死亡を交通局の緑雨さんへ電話で知らせましたが「……かつての光笑会々員六人の中かほる、艸楽、禿山、里十九と死んでしまつてアトはあんたと私だけになりましたなア」と述懐したことでした。

里十九親分が本社句会の名幹事長だつた頃私もその下で仕込まれたもんで、支部連合忘年川柳大会の下足番をさゝれたり、新年句会の余興「鈴ヶ森」では拍子木叩きの役をあてがわれたり……親分の言う通りになつていたが実に愉快なたのもしい親分でした。

もう親分の義太夫も淡海節も国定忠治も阿波踊も、それから句会での「リトーク」というアノ特徴のある名乗上げもきいたり見たりすることが永久に出来なくなつた。嗚呼。

親分が死んで背筋が寒くなり　豆秋

里十九句抄

紋付を着てもやつぱりだらしなく

春雨に芝居ときめて母も行き

道巾を一ばいに来る女連れ

揃へと云ふに呉服屋心得て

自分の子かと思ふ日のあり

塩まいて少しは胸のおさまりぬ

七十を過ぎても髪の事を云ひ

怒るだけ怒つて十日置いてやり

まあ俺にまかせておけと懐手

一決で船長さんが名付親

一路集

身の上

市場沒食子 選

酒呑みはぐちをこぼして泣寝入り　金太郎
代議士も顧問で身の上に泥をつけ　養人
身の上の疵今頃に後悔し　辰始
子を二人国に捧げた此身なり　風の子
横綱の身の上話は記事になり　とよ
身の上をかくし旅から旅で果て　古心
身の上を秘くしだらりの帯をしめ　圭水
求愛へ只身の上の恥づかしく　春日
身の上を自業自得として暮し　藤波
改心の身の上話聞いてやり　芳風
入院のベッドへ身の上語り合い　千流
身の上は同情するがと手錠はめ　三平
身の上を聞くだけ聞いて署へ送り　八文銭
祖父さんの身の上話皆眠い　自峯
押売の身の上聞けば元大佐　迷人
身の上に泣いてやつてる同性愛　公生
薄給の身の上くじの夢を買い　葉乙女
平凡な身の上非凡な話ぶり　丁坊
身の上を秘めてニンマリ笑つて居　大然
身の上を話す相手のほしい年　成人
身の上はかくしつゞけてナンバーワン　多久志
身の上を語つてからは良く笑い　伊津志
身の上え嘘も交じえた泣落し　夢介
身の上を聞いて安心して盗られ　鉄児
連れ子して子の身の上に悩みつゝ　宏
身の上を語る詐欺の手またかゝり　満佐志
使はれる身の上御無理御尤も　一策
身の上は辞令一枚で浮き沈み　緑風子
妻妾が身の上相談所で会い　卓風
身の上をきかす社長の機嫌よく　栄久
身の上を秘して働く品のよさ　金山
身の上を語るあわれな父帰る　案山子
身の上を語れば涙先に立ち　梅里
社長とは同級だつたと老社員　満秋
身の上は米と麦との違いだけ　花団子
一応は身の上話し補助を受け　酔歩
捨てられた身の上とも知らず笑つてる　桔梗
身の上を聞く役人が陳情し　戍子
身の上は生家に寄れず墓に泣き　素百々
たゞ拇印だけで身の上保証され　九呂平
曲馬団みんな身の上曰くあり　十九平
身の上に逆ろうている高利貸　しげお
身のざんげ匿名として寄附をする　方眠
役得のない身の上ど誰も見ず　弘朗
身の上を明かして弱い母となり　牛歩
身の上を秘めて脂粉の中に生き　よし子
身の上を嘲けるようにジャッが洩れ　一平
身の上はこの通りです義手義足　栄治
身の上を聞いてそれから寄りつかず　紅月
身の上が似てそれからの恋となり　南天郎
屈託もない身の上を持て余し　十悟
看護婦のある日身の上きかされる　文郷
養老院昔を語る身のこなし　寛虚
身の上を映画のように聞かされる　悦子
身の上の秘密悲しい恋となり　東岸子
幸福な身の上ばかりクラス会　直人
身の上が余り似ていたゞけの恋　葉光
繰り返す身の上話母老いぬ　寿恵
身の上へ答える女史の太い声　牧人
身の上を伏せて学資を母貰ぎ　代仕男
身の上をちらりと聞いた足袋の裏　雄々
シベリアの父の身の上案じられ　美子
身の上を素直に言わぬ家出の娘　無津美
おづ〳〵と踏み込む家庭裁判所　夜潮
自殺せぬとこが身の上違うだけ　広作
身の上はノーコメントの混血児　翠露
身の上を聞く交番の股火鉢　実信
かち合つた瞳に身の上を見透され　良坊
身の上を相談欄に問うて見る　ひでを
少年期まではお坊ちやま〳〵　芳仙
親譲り座して楽隠居とはなりぬ　満年
身の上はどうあろうとも僕の君　摩天郎
身の上はどこかで聞いたような事　五月坊
身の上を転安軽く聞流し　楽太
身の上は言はずニコヨン詩も作り　不二
古疵のある身の上を聞きたがり　秀敏
トラブルを起し身の上案じられ　和友
浮浪児の上手に身の上つくり上げ　茶々
易者ふと我身にふれて気が滅入　鳥石
身の上を三段抜きで素破抜き　ひか平
身の上へ障子の蔭が貰い泣き　光郎
身の上はやはり本家の格を持ち　賀峰
身の上をカルテ妻より知つている　春風
めぐまれぬ身の上夢を持ちつゞけ　凡太郎
平凡な身の上親の職をつぎ　莽花
身の上は養老院へ来て忘れ　同
身の上へ涙そゝいでやる婦警　恵二朗
よう似てる身の上相談読み直し　同
今更に我身の上を云ひしぶり　喜久治
落ちぶれてから身の上が邪魔になり　同
煙草の輪身の上話聞いていず　青竹
身の上が違うと女軽く逃げ　同
身の上に愚痴も交へて老いざれて　太路
身の上へ唯気の毒とそれつきり　同
街のピエロ暮れゆく町の奥へ消え　九里三
一日をのれんの酎で忘れて来　同
身の上がばれて女将もちとあはて　トシ坊
〃・一流にされて身の上ほじくられ　悦子
〃・月並な褒め方文撰工嗤う　蘇堂
〃・母だけが知つてる身の上持つている　黒天子
〃・身の上を隠すマダムへ野暮な問ひ　一路
人・ちり鍋で身の上話よう生きて来た　鮎美
地・身の上は聞かんといてと夜の女　別城
天・身の上は明日聞くことにして寝かせ　日満

恋敵

松江梅里 選

恋敵熱海の月を無駄にせず　鳥石
物量のライバルへ竹槍の我れ　恵二朗
小説の筋書でくる恋敵　良坊
恋敵出て来てからの身だしなみ　南天
スポーツで来い我れ音楽で闘はん　黒天子
どうしても勝たねばならぬ牡丹刷毛　多久志
恋敵金も力もない奴で　寛虚
淡々としてライバルへ茶を入れる　省三
ライバルがどうも気になる欠席し　莽花
恥もなく媚一ぱいの恋敵　十悟
恋敵とは面白い外へ出ろ　トン坊
恋敵しや〳〵〳〵とよく喋り　葉乙女
恋敵だしぬいて来たランデヴー　一平

たきつけている人がある恋敵　大然
恋敵ともに敗れて手を握り　満佐志
恋敵とう〳〵心中してしまい　茶々
本当の自分がわかる恋敵　万古
恋敵けなして心底みすかされ　満秋
恋敵だつた昔を笑い合い　牧人
情炎をかき乱す日もある恋敵　素百々
かも知れんと行けばみつけた恋敵　太路
ライバルを女将上手にたきつける　巷雨
恋敵らしい電話へ耳をたて　夜潮
恋敵強い女の意地を知る　和友
恋敵野球姿のまゝでくる　日満

ライバルのアクセサリーはよくみえる　光郎
恋敵みつともないほど買いでゐ　方眠
ライバルの若さへ始終気をもませ　千流
恋敵だつたせと肩をつゝかれる　凡九郎
恋敵愚人と知つた日の悩み　別城
ライバルの左遷へ餞別はずんでき　夢介
ライバルが来てパーティの座がしらけ　十九平
ライバルがどちらも見舞持つてくる　雄声
ライバルに別な女が出来て憂　同
ライバルも私も捨てゝ嬢くと云ふ　秀敏
ライバルがいるプレゼント選りに選り　同
恋敵負けるものかと無理な無理　葉光

さぐりあいながら呑んでる恋敵　同
恋敵馬を射止める術でくる　鮎美
恋敵だつたその臨終をみてやろう　同
千流　佳・恋敵だつたその臨終をみてやろう
凡九郎　佳・恋敵金とひまとを持つて居り　満年
別城　佳・音もなく薄を掘つてた恋敵　恵二朗
夢介　佳・ライバルをほめる女の憎らしい　実信
十九平　佳・呑むことにかけても強い恋敵　鉄児
雄声　人・ライバルに見られてこぢるコンパクト　文郷
地・恋敵先に帰つて気を残し　日満
天・ライバルの傘は倒れたまゝがよし　芳仙
天・恋敵そんな洒落気へ違くゐる　凡九郎
光　軸・ライバルの靴踏んでゆき蹴つてゆき

柳・界・展・望

▼本社では五月句会を五月八日午後六時から下寺町二丁目市バス停前光明寺で開催する万障繰合せて出席されたい。なお当日、前句会に御病気御静養の為め延期となつていた路郎師選「首相」の兼題の御披講もある筈▼大阪逓信病院川柳会は四月十七日午後二時から路郎師病臥で流会▼南区医師会文化部杏林川柳会は四月二十日午後七時半から一伸居で開催▼南海電鉄川柳会は四月廿六日午後六時から粉浜の親和寮で開催以上何れも路郎主幹出席なお前月の南海電鉄句会へ路郎主幹出席と報じたが病臥されたため欠席されたので訂正する。▼川雑淀川支部句会が五月十一日午後六時から香林居で開催される。兼題「若草、犬、学者」の三題▼川雑備前支部句会は三月二十日久米雄居で開催▼川雑淀川支部（大阪市）四月十日夜香林居で開催▼川雑弓削支部四月句会を四月三日沼田呉服店に於て第四回町長杯争奪句会として開催盛会の由、当日の町長杯は福島鉄児氏が獲得された。▼川雑出雲支部は三月十六日夜岬月居に於て三月句会開催、句会後、同人の責任事務分掌決定、益々今後の発展に尽力されるとのこと。▼川雑京都支部に於ては三月十六日午後六時半から仲源寺に於て夢裡追悼句会を開催読経の後、川雑四月号「夢裡逝く」を田中鳥雀氏読み上げ、故人を追慕された。多数来会あり本社からも武部香林氏が代表出席し「早梅の香り惜しまれこぼるゝ日」の弔句を捧げられた。▼川雑堺支部は三月二十四日夜六時から三月句会を摩天郎居に於て開催▼川柳阿倍野支部句会は四月廿六日夕から西光寺で開催▼川雑下関支部は四月十一日福江町の慈光寺で開催▼広島川柳会第一例会を三月五日午後六時から広島貿易館にて開催、第二例会を三月十五日午後六時から広島貿易館に開催。▼広島鉄道管理局春季川柳大会を三月廿七日午後一時より広島鉄道職員会館に於て開催▼玉野市に於ける三井造船川柳会三月例会を三月二十五日午後六時から全市三友クラブに於て開催された▼豫て計画中の川雑倉敷支部結成句会は三月十四日全市本町観竜寺に於て開催、出席三十余名。三月十五日から支部発足、支部長木村千容氏、一切の事務は田垣方大氏が当らるゝ筈▼川雑宇部支部（山口県）は三月廿八日創立句会を半休居に於て開催川雑下関支部からも来援があり盛会だつたと、支部長は国弘半休氏▼川雑赤坂支部創立句会（岡山県）が四月十一日午前十時から赤坂中学校で開催された。支部長は政田大介氏▼堺市に於ては、民間文化団体並びに個人的諸文化サークルの統一連合機関として「文化友の会」を近く結成、川柳道もその一翼として益々活動されるとの事お悦び申上げる▼食満南北氏は五月二十一日NHK第二放送で「松の落葉」を放送された▼上林粗影氏（宇部市）は沖宇部炭鉱晴風寮長として精励さるゝ傍ら、川柳発展の為尽力するとのうれしい消息があつた▼堀田春斉氏（大阪府）は三月末を以て日本精版会社を退社された由▼小田柳叟氏（大阪府）は千石荘でカリエスの手術をされたが経過良好の由▼前田雀郎氏は今回東京都豊島区駒込一丁目一六五の新居へ移転された▼大島濤明氏は職業の関係上熊本市花畑町建設業会館に転居された▼鎌田たかし氏は堺市大浜南町一〇六へ移転

（摩）

正　誤

前号二〇頁上段末尾、野甫氏の句看護婦日誌は看護日誌の誤り

いのちある句を創れ

花地物語

投稿規定　▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社夢裡追悼句会

三月十三日　於光明寺

○

春寒料峭の三月の本社句会は、掛けても思わんや、夢裡追悼句会とならんとは、嗚呼人生真に無常なる。今また席上、相談役永田里十九氏の訃を伝う。一層この感を深くするのである。当日夢裡氏と深交の京都支部鳥雀、晴芽の両氏を始め続々来集する者で会場も手狭まを感ずる状況であつた。当日路郎師の御話は、夢裡氏の追憶談で特に孝養篤き数々を挙げ、師の滂涙共に下る話も、とぎれ勝ちで、もうこれ以上話せないと結ばれ、一同声なく涙を飲む有様であつた。鮎美氏の句評は、風来子、妄夢両氏の句に短評を加え、後夢裡句抄から数句を読んで追悼の誠を致された。続いて席題、兼題の披講に入り、不朽洞優勝カップは友淵貴山氏の把握さるゝ所となつた。閉会午後九時。（摩）

出席者＝路郎・白水・南風郎・武助・ひろし・京一楼・黙平・一朗・三司・花村・秋窓・生々庵・秀雄・太路・十悟・香林・水堂・静馬・紫香・いさむ・木声・桃源・塗杖・古方・一瓢・圭水・葉平・凡九郎・丁路・葉光・淡舟・博也・鮎美・一三夫・博子・文蝶・蜂呂・正斗・貴山・雄声・小松園・賀峰・ひさご・晴芽・栞・鳥雀・緑雨・操子・浩青・没食子・きさ子・盛正・葭乃・梨里

兼題「遠慮」　麻生路郎選

遠慮ない姿四五本空けて居る　鮎美
一周忌遠慮さしたい女が来　文蝶
出世した子へ遠慮する国の母　小松園
分の厚い座布団遠慮勝に居る　紫香
遠慮のない二人へ星が降りそゝぎ　香林
新婚の時の遠慮がまだ祟り　水堂
遠慮したとも知らず内気だね　武助
遠慮せぬ子供に母は目でしかり　南天郎
見えすいた遠慮やたらにしているよ　凡九郎
割勘で呑んでも新参遠慮をし　花村
特売場女は遠慮して居れず　一朗
遠慮なくズバ〳〵云つて煙がられ　雅楽太
遠慮して見たが本当の自己でなし　博也
遠慮しなさんなと上眼つかわれる　栞
遠慮ない二人の会話羨まれ　武助
遠慮せず間借り大きな音を立て　南風郎
つり銭を遠慮さゝれて床屋を出　秋窓
劫負せで社長へ遠慮の義理が立ち　生々庵
割勘と判つて遠慮して居れず　淡舟
遠慮して坐りや迷惑がる末座　一瓢
遠慮してる間に洋食の皿は消え　香林
遠慮なくお産に母を呼び付ける　賀峰
遠慮して飲まぬお酒と知つて酌ぎ　葉光
無遠慮の親しさいきなり胡座組み　武助
遠慮した人とも見えぬ喋り様　一三夫
餞別は遠慮した程入つてず　三司
無遠慮なGIさんのゴメンナサイ　栞
遠慮がすぎて養子かと訊かれ　葉平
遠慮なく拝借します米一升　浩青
住込の遠慮しないで飯を食い　操子
遠慮ない無心どないかしてゐる気　水堂
遠慮なく云うて会社を馘になり　小松園
無冠の帝王とは遠慮ない言葉　栞
結局は坐る遠慮の床柱　黙平
遠慮した帰りに高い酒を飲み　白水
祭壇に遠く二号の伏目勝ち　紫香
遠慮なく呑んだ若さが気に入られ　雅楽太
遠慮なく言える手紙の返事かく　三司
ざあまの遠慮は愛犬を連れながら　鮎美
遠慮しているうちに権力どこやいた　古方
兄さんは遠慮すぎると嫁のこと　鳥雀
月下放尿誰れに遠慮がいるもんか　葉平
譲り合う内に電車は出てしまい　鳥雀
自信満々社長さんにも遠慮せず　香林
親子丼ぐらいで遠慮もして居れず　淡舟
ご遠慮はなさらないでご遠慮さし　浩青
遠慮なく坐るお茶屋の長火鉢　葉平
遠慮して借る石鹸が辷り落ち　三司
公私共遠慮が過ぎて食いはぐれ　丁路
遠慮なく言えと先輩有難し　多久志
子供等が遠慮を知らぬ道供養　ひろし
落ちぶれた友へお櫃のまんま出し　小松園
遠慮した菓子の蠅追ふ役となり　きさ子
遠慮しておればエレベーターまで閉り　貴山
遠慮せず折はないかと云うている　路郎
遠慮している焼香をいそがされ　同

兼題「支店長」　橋本緑雨選

支店長今日は忙しい胸の花　きさ子
あきまへんとは大阪弁の支店長　三司
支店長学歴だけで来て困り　一瓢
本店と意見が合わぬ支店長　浩晴
支店長になつてお金がほしくなり　操子
支店長近頃不在勝ちとなり　正斗
支店長と言う印を強く押し　兼比羅
看板を塗り替えさせる支店長　鮎美
小心が取柄事故なく支店長　一三夫
支店長何かあつたかよく叱り　小松園
しかたなく株持たされた支店長　三司
お隣は支店長と云う生活　栞
支店長大阪の灯を恋しがり　香林
支店長赴任した日は怖い顔　多久志
終バスに支店長も居る酔うて居る　季賛
浮貸へズル〳〵〳〵と支店長　雅楽太
見込まれて左遷のような支店長　葉光
支店長地理を覚えた頃かわり　紫香
支店長として不渡りが気にかゝり　博也
支店長長距離電話へ泡を食い　一三夫
こゝでもう土になる気の支店長　黙平
商魂をゆつくり話す支店長　鮎美
新しい名刺も刷つて支店長　一朗
小使も兼ねて名ばかり支店長　京一楼
花も植え雞も飼うと支店長　貴山
支店長蝶ネクタイの似合う人　南風郎
東京へ叱られに行く支店長　小松園
支店長初段に近い石も打ち　没食子
支店長本社の指令ですと逃げ　正斗
当分は別居で暮す支店長　紫香
支店長多趣味で支店活気ずき　香林
支店長だけが知らないあみだくじ　日本村
支店長隠し芸から見直され　桃源
支店長酒は嫌いですまされず　水堂
この土地の呼吸にも合つて支店長　没食子
支店長かたい話へうまが合い　文蝶
支店長もみ手で迎えたよい得意　南風郎

兼題「ピアノ」　田中鳥雀選

捜索の検事ピアノの蓋も開け　小松園
ピアノ打つたいぶ横顔いつかの日　盛正
差押え月賦のすまぬピアノにて　小松園
ピアノもう鳴らず汚職の火が上り　日本村
別荘は売れたピアノはまだ売れず　一三夫
近所の瞰見張るピアノ門が開き　黙平
ピアノ売つて要は淋しき我がくらし　博也
ピアノ今日黒く光つて佳き日なり　京一楼
失恋のピアノ悲しい曲ばかり　圭水
ピアノなど買えない客にさわられる　文蝶
別荘のピアノを乱すキヤデラック　太路
お目出度が近くピアノの軽い曲　きさ子
ピアノある日二人の私語もきかされる　蜂呂
花吹雪ピアノの窓は閉じたまゝ　葉光
ピアノの件宿題にしたPTA　一瓢
卒業のピアノ小さな胸悲し　一平
リズム体操ピアノに合す青春譜　香林
ダ、ダンダンと破れし恋のピアノなり　秋窓
新校舎新らのピアノも取り揃え　季賛
振袖でピアノに向う独奏会　丁路
楽譜などいらぬピアノでそれもよし　凡九郎
幽玄なピアノ門柱まで流れ　太路
ピアノ弾く指はリズムに踊るよう　一平
切なさをピアノに托す狂詩曲　蜂呂
恋しさをピアノに托す日もあつて　葉光
寄附した人へピアノは尻を向け　木声
老朽の校舎へピアノ寄贈され　雅楽太
二人のピアノへ窓の月も青　凡九郎
ほしいけさピアノ買う程たまりません　博子
ピアノ弾く少女へ淡い旅愁漂く　賀峯
これ見よとピアノの位置は応接間　塗杖
ピアノある事が見せたい応接間　生々庵
春の水ピアノの音で流るゝよ　葉光
ピアノより歌がさきすむ一年生　南天郎
幼稚園ガヤ〳〵ピアノはそっちのけ　博子

ピアノ弾く先生も泣いている卒業式　南天郎
妹は机をピアノにして歌い　博子
みかん箱のピアノで唄う学校ごゝ　同
ピアノ買う新興あり売る斜陽あり　桃源
お下げ髪ピアノへ春を告げて泣き　一朗
放課後のピアノに教師の夢を知り　花村
愛人に聞かれピアノの手が震え　没食子
入学にピアノの寄附を言つて来る　正斗
誰が弾くピアノか山の陽は更ける　三司
ピアノ弾く眼もうるんでる卒業式　南風郎
ドレミファソラシドばかりの子のピアノ　淡舟
金策の耳へピアノはまだつゞき　小松園
哀別のピアノの細い細い指　凡九郎
ピアノピアノあちら名前をつけてよし　栞
楽器店ピアノは見せるだけの位置　貴山
弾きもせぬピアノに女中腹を立て　花村
卒業へ今年はピアノ寄附らしい　太路
月賦でもピアノが買える果報もの　丁路
親の虚栄でピアノのA、B、C子さん　栞
接収解除家附のピアノ戻つて来　水堂
やけくそで弾けばピアノもやけの音　丁路
妖しくもピアノに躍る指を見る　香林
足継をして天才はキーたゝく　一瓢
設計図ここはピアノを据える位置　十悟
ピアノ今日ヤツトン節も叩いてる　葉光
かゝる世にピアノが売れる怖ろしさ　京一楼
悲恋やるかたなくピアノにうつ伏しぬ　晴芽
水仙をゆるがせてキーはずむ　同
照明のゆるきピアノの艶にゐる　白水
処女として最後のピアノ友と弾き　紫香
ピアノ音遠く玄関払いされ　一瓢
裏町の春教会のピアノの音　京一楼
エプロンが輪になる中に鳴るピアノ　烏雀
疲れ果て造花の影にいるピアノ

席題「お人好し」　西森花村選

お人好し近所の子からあだ名つき　小松園
お人好し又町内を歩かされ　同
お人好し怒ればおそろし大男　秋窓
お人好し二階借りにも使われる　一三夫
お人好しかえしに来るこまだ信じ　南風郎
寄附金の嵩に見られるお人好し　貴山
お人好しご自分も一寸はがゆがり　生々庵
押売りに我がお人好し知らされる　蜂呂
早く来てまた待たされるお人好し　いさむ
ちよこ〳〵と夜霧の中のお人好し　鮎美
お人好しそこを養子に見込まれて　淡舟
お人好し要がしつかり世帯〆め　桃源
納税一番を競うお人好し　雄声
お人好しにされても笑える肚が出来　静馬
お人好しも良寛様とまで行かず　古方
お人好しだとは思えど放つとけず　きさ子
お人好しとは言わないでたかりに来　塗杖
お人好し泊れ〳〵と狭う寝る　南風郎
トンコ節聞いて待つてるお人好し　木声
お人好しらしくネクタイゆるんでる　生々庵
お人好しかんじんの事聞き忘れ　文蝶
不器用な手つきゆつくりお人好し　鮎美
最後まで言われ気のつくお人好し　きさ子
生字引で満足してるお人好し　花村

席題「人　出」　菊沢小松園選

二男二女人出の中でくたびれる　紫香
もみくちやにされて人出の人にゆれ　博也
春の日の人出もよそに薬瓶　桃源
人出のほこりあびて迷子泣いて立ち　南風郎
無一文で今日の人出の噂する　きさ子
商魂は人出へ投げる声となり　京一楼
人出さけ花のない山見て帰り　一三夫
俄雨人出の列がみだれたり　圭水
提灯が煙る人出の砂ぼこり　きさ子
逆ろうて人出を右側守る人　黙平
肩が摺れ脊が摺れ人出動かない　京一楼
暇人が集る人出に僕も居る　武助
人出人出賽銭握つた手が抜けず　花村
逢曳も人出の渦に巻きこまれ　鮎美
此の人出皆んな寝るとこあるのかな　木声
忘れてた俺も人出の一人にて　生々庵
スリも今人出の渦に巻き込まれ　鮎美
この人出知つてる顔が見当らず　武助
泣いた子が人出の波に逆に行き　三司
人出から戻り我が家のお茶の味　水堂
風船が人出の中で音を立て　三司
この人出みんな喰べてる恐ろしさ　雄声
広告に釣られる人の多いこと　小松園

席題「好敵手」　戸田古方選

気の長いとこまでよく似た好敵手　みさ子
好敵手何時か一人にされている　武助
負かされて居てもやつぱり好敵手　三司
好敵手こんどは家系の話が出　正斗
好敵手本人同志は仲が好し　葉光
好敵手今日は眼鏡を忘れて来　小松園
好敵手顔見合せてニッと笑み　生々庵
好敵手どちらも見栄を競い合い　水堂
なけなしの金もはり合ふ好敵手　雄声
今日の僕は彼奴がいたからさ　凡九郎
好敵手落着き払つた坐りやう　栞
好敵手部屋で仲よく話して居　いさむ
コップ酒分けてうれしい好敵手　きさ子
好敵手取巻き圧えて笑い合い　秋窓
好敵手取巻の方が殺気立ち　花村
好敵手昔も今も変りなし　いさむ

どちらも負けてほしくない好敵手　正斗
好敵手を古人に求め二階借　花村
好敵手はる〳〵海を越えて来る　文蝶
年の差は云わず結構な好敵手　三司
片つぽが死んで淋しい好敵手　紫香
握手した手がやわらかい好敵手　晴芽
好敵手うんと長生してくれろ　葉平
独走好敵手今日はいず　古方

川雑 **京都支部句会**（京都市）

夢裡追悼句会
三月十六日　於　仲源寺
大鶴喜由報

わが耳にボリューム低き君の声　幸男
たんざくがゆれて淋しい部屋にする　寛一郎
しのぶ会夢裡とどこかで声がする　烏雀
写し絵に君の声きく春寒し　蘇海
お別れの淋しく雨の東山　亀一
先生の亡き教室の春きびし　晴芽
両方の稼ぎを合せ新世帯　晏子
二三べん叱られて寝る手内職　亀一
稼ぎ者夫の運に恵まれず　仰山
稼ぐだけあとは寝るだけ子沢山　同
とうがらし此の街角をよく稼ぎ　晴芽
稼ぎ高しれていますと妓は笑い　九角
共稼ぎプラン替する妻身重　光二郎
次男以下工場へ出して田を守り　みてい
理解して子も進学ののぞみすて　九角
理解ある母は二人へ遠くいる　文子
流石父薬になると笑ろただけ　亀一
叱られますと辞退して受ける　紫蘭
辞退せず受けて返しに気をつかい　九角
辞退した傘がくやしい雨となり　久子
御辞退をなさいと妻の瞳の動き　紅寿
咳きをぬけて電車を児と下りる　紫蘭
吾が蒔いた芽を迂闊にも草と抜き　草之助
手洗の下にも春を感じた芽　晴芽

川雑 **下関支部句会**（下関市）

三月七日　於　下関駅
石川倪流洞報

株を持つ条件つきで就職し　一歩
待ちぼけの苦情をバスの数で云ひ　一規
就職も易者の言葉あてにする　古苦柳
就職の予約学士にされている　かうたる
絶食を解かれた膳に梅一つ　一鶏
就職へ縁故縁故とあわてだし　みつる
汲み捨てる舟垢の春の温みなり　柳蛙
就職へスポーツマンという強味　戌理智
今朝の事故考えながらバスを待ち　司楼
孫が来て茶の間明るいものになる　九呂平
にわか雨既がにぎわうバス乗場　愚遊
一人づつ拾つてバスは峠行く　半休
茶の間だけ残して留守の灯が消され　蘇人
二十円貼つて別れの手紙が来　同
晩酌の機嫌茶の間を笑わせる　柳慶
つてのある就職赤くしるしされ　鬼道
就職も頼まれて来る里帰り　ほなみ
チエ二十円かと小遣銭に愚痴をい、　同
家の前でバスは停ると又飲ませ　同
次男三男就職みんな保安隊　いさお
団欒の母は聞き手でいる茶の間　藤四郎
二十円安い手拭寸足らず　白馬
溝川へ春が来た来た猫柳　倪流洞
峠茶屋のりはに決めてバスが開通き　同
溝一つへだてゝ作の出来不出来　妻揚子
百燭が灯いて茶棚の目立つ艶　同
老境に入り梅干の日が続き　良坊
ネクタイも母が手伝う初勤め　土箒坊

川雑 **出雲支部句会**（出雲市）

三月十六日　於　岬月居
尾　緑之助報

「螢の光」丘を伝うて来る佳き日　芳風
母よりも父よりも伸び卒業し　壮
卒業式親が泣いてる子の答辞　峯雲
捨科白ふと気にかかる親心　岬月
捨科白さみしい肩になつて去る　緑之助
爽やかな陽差しにふわりシャボン玉　独仙
汐干狩歩き疲れた蟹の泡　代仕男
ふる里の灯が見え急ぐ降り仕度　章坊
手相観の灯にあばれてる金亀子　椙鳥

川雑 **備前支部句会**（岡山県）

二月十三日　於　久米雄居
浜田久米雄報

あかぎれの手で豆餅がうまく焼け　娯句楽
もう年を取り度くもない餅をつき　馱流児
新緑の候を食べてるかしわ餅　正州
これからが子にやる分の杵の音　柳穂
餅焼いてもちのふくれを嬉しがり　久米雄
プラットの風が冷たい終電車　浄美
プラットの紙屑かもめ号を追い　やす子
セーラーの子が口笛を吹いて行く　半仙
牛の尻追うて口笛帰つて来　東岸子
ほろ酔へ母も調子をよく合せ　柳風子
餅を焼くあみは歳暮の五等賞　甘井子
プラットへ上役だけがお出迎え　清風
プラットの花嫁皆を振りむかせ　みや子

川雑 **弓削支部句会**（岡山県）

二月六日　於　弓削駅長官舎
福島鉄児報

娘は十九ヌード写真にたぢろがず　七面山
制服をぬいでヌードとなる身体　奇童
若き日の日記へヌード挟んで居　正平
押収のヌードに署内一さわぎ　笑柳
首飾つけたヌードの犬に似て　冨士
風呂上り一寸ヌードを真似て見る　三平
上京の目になつかしいネオンの灯　桃々
孝行は忘れなさいとネオンの灯　牛歩
二階からネオン見ている空財布　笑泉
ポーナスはここで頂くネオンの灯　皿水
汽車の窓ふいてネオンの灯に見とれ　紫舟
ルージュちと直して次の鴨を待ち　牛歩
口紅へ四十の皺はかくされず　鉄児
試歩までになれてルージュもつけて見る　正平
指切りもしたのに切符がふいになり　呑天
乗越を起され切符見付からず　鉄児
発車ベル車内切符買うときめ　奇童
歌舞伎座で見合さき気の切符が来　笑鬼
団体の切符は髭の人が持ち　冨至
アベックの切符重ねたまま切られ　文郎
保険金もらえる年で先が知れ　同
一と月で投げる保険で義理をたて　巷雨
保険屋がくると俄に忙がしく　すみお
保険金だけが遺産と知らなんだ　鉄児
離婚するつもりの別居とは知らず　笑泉
原因の言えない離婚と母は知り　笑風子

阪田謄写版

大阪市北区芝田町二五

会株社式 **阪田商会**

電話福島五九九一番
五六三一～四番

雑川 淀川支部句会（大阪市）

三月九日　於 香林居　武部香林報

姐さんのようになりたいおませの子　若菜
母親が赫くなるような口を利き　水堂
ラッシュアワー月賦の服がひしめきて　発中
ハネムーン月賦の服と妻知らず　真一
嫁く方も月賦迎えるのも月賦　野甫
月賦ならテレビも買えるこゆう暮し　多久志
旧姓のまゝで月賦はまだ続き　野甫
もう桜咲くので月賦ちと待たせ　香林
借金と月賦会社へ置いて消え　野甫
祖母からの雛で清貧まだ続き　同
せがまれる雛の値札を恐く見る　香林
勤人書く事がない日記帖　花村
勤人バス待つ五分バチンコヤ　都詩子
献金だ汚職だ俺は袖カバー　多久志
吊皮に五人養う身を委ね　水堂
休みまで用をためとく勤人　花村
停年を待つ身可も無く不可もなく　香林

雑川 日立櫻島支部句会（大阪市）

三月十五日　於 日立造船桜島工場　丸尾潮花報

亡き母の思ひ出鏡あるばかり　錦水
ネクタイを結ぶ鏡へあごをふり　秋花
これ以上初縁の方に無理言えず　一丶
初縁とは思えぬひとの煙草の輪　潮花
嫁かず後家の名を返上す三十二　凡十
持参金ついた初縁をけむたがり　同
女教師の初縁芒に似て淋し　一飄
別居することで初縁がまとまらず　呑水
子の初縁親次々にぶちこわし　春猿
ダンサーの情け花籠空になり　望峰
花籠の百合が開いて通夜が明け　呑水
花籠をかかへ生活の宵を出る　狸村
花籠のバラが燃えてる初舞台　潮花
姉ひとり春にそむいて死をえらび　三の司
雨もりを大家見に来てくれただけ　千代美
雨だれが窓のガラスをつたて落ち　貴代
雨ぽつり〳〵と道を濡らしてる　花世子
逢曳きがガードの下で雨をよけ　ひさみ
濡れて来た袖を友から疑はれ　花子
降り出した雨へ物干あわてて　花代子

雑川 堺支部句会（堺市）

二月二十五日　於 摩天郎居　八木摩天郎報

豆炭へさて迷惑な二階借　春翠
消えてんのかいなと豆炭割つて見る　凡九郎
妻の留守がら〳〵だけで泣きやまず　南風郎
貧しさを知つてかおもちゃ欲しがらず　摩天郎
買うて来た玩具へ家内中が寄り　凡九郎
ふだん着でいてもきれいなミスニホン　南天郎
アラモード普段着ですと云うくらし　凡九郎
猛犬がゐます此家で住む書生　武助
おばあちゃんあるので平家建にする　貴山
人生の楽しさ借家の涼み台　雄声
のぼり皆風にはためき読めもせず　圭水
あの頃の幟長屋の窓覆い　春翠
座長の名書いた幟は群を抜き　圭水
のぼり立て千鳥にあるくチンドンヤ　南天郎
売出しの幟はぬれたままの雨　貴山
鯉幟ここも男と云う威勢　武助
水洟をかんで焼香順を待ち　雄声
水洟も恥しからぬ程に老い　摩天郎

雑川 布哇支部 ウイロー社句会（ハワイ）

於 柳云亭　古川魔花麗報

純毛のスタイル生きた風を切り　笑有
風評なエイドンケアーで後家同志　紀南児
諦めの心を揺する風便り　柳葉
風向きが悪いか女将座を外し　魔花麗
風邪引いたイヤ引かせたと新世帯　快夢起
子沢山生きる師走の風を衝き　虹橋
競争車見栄とスリルの風を切り　迷朗
何処を風吹くかと女口説聞く　芳雨
嫌な風成金風にボッス風　伯米
常夏の島にも風邪が大はやり　煙波
回顧談風化したような恋に触れ　草一郎
更けて行く夜の風鈴忙しそう　暁舟
風の子に育てぬ嫁が気にくわぬ　彩民
挨拶は風向きを知るバロメーター　彦坊
ムームーの裾をとらせる南風　拝山
（註ムームーは布哇スタイルの婦人服）

雑川 鳥取支部句会（鳥取市）

三月十四日　於 いすゞ店　大西八歩報

ポケットマネー一寸汚職の臭いする　陽月
家建てた税吏は変な眼で見られ　三歩
地方吏の汚職チョッピリ飲んだだけ　同
世はこんなものか汚職の字がにくし　日満
味方とも思へぬやうな右派に左派　八文銭
知らぬ間に味方にされて迷惑し　ひろし
極道の味方は母が一人だけ　三歩
よしあしは如何あろうとも子へ味方　日満
系累のなき気楽さのまた淋し　湖山
お茶づけの気楽な里へ孫をつれ　新雪
MSA少しは気楽に暮せるか　秀和
借金を返えし気楽な月となり　細田
膝割つて気楽な膳の箸を取り　湖山
抜けさくかと思はれる程呑気なり　敬一
犬と猫飼つて気楽な未亡人　星雨
姑を送つて気楽なお茶をのみ　律子
春ですと言はんばかりのめかしやう　一男
本屋から春か二月も早うくる　吾柳
若返り春の人出に押されて出　湖山
春がきて子を持つ親の気をもませ　吉岡
生きている歓喜春菜をつむ老母　耕民
もの言はぬ二人を写す春の水　岩佐
上阪に春のおどりも見て帰り　遊星
春爛漫女房の外出ふえてくる　同
その辺までその辺までと春の宵　ひろし
春風が旅の心を軽くする　八歩

雑川 倉敷支部句会（倉敷市）

三月十四日　於 観竜寺　田垣方大報

よいさめて女房の土産だけはさげ　実穂
買物に出て買う物を買い忘れ　秀魁
三本の葱も娘の店で買い　空頭
常客と云う買物に店主が出　千代春

買物はここらと株屋如才なし　千容
ひやかしが予算はずれの物を買い　夢刀
たたき売あわて買えばきずが有り　風の子
買える日が遠いテレビの前に立ち　馬楽
買物のお供ねえやも少し塗り　春日
仕入値で売つてもお客安がらず　越鳥
奥様と云われて高いお買物　天風
旅鞄子を想う日の土産店　桂月
初舞台お師匠さんも緊張し　春日
緊張が過ぎてドモリと間違われ　吉男
緊張した部屋の外では労働歌　秀魁
社長室ノックの前に緊張し　双子坊
次の番になりネクタイ(ふと)行く手　桂月
家中を緊張させた置手紙　一善
手袋がおもむろにとる判決文　日出雄
がつかりとさせた夜明の雨の音　鯉風
予定また反対居士につきあたり　桂月
予定より早い視察が慌てさせ　万吉
二人でも喰えぬ予定へ不意の客　呑長
予定より遅刻したのがよくしゃべり　夢刀
予定外支出こま〳〵愚痴る妻　千容
置去りもカッギ屋予定に入れてあり　吉男
値切られる予定の正札附けて置き　鯉風
予定変更財布の都合とわ云わず　桂月
篤農の報い予定を越えた俵　斜木
アブレ組失恋しても次が出来　芳樹
失恋の果てと女給のよく喋り　一善
妹の友の嫁く日の茶碗酒　茂久朗
失恋は金で敵をとるつもり　方大
プロークンハートお花の水も涸れている　春日
抽出をあけて失恋また悩み　星光
失恋を書いて淋しい原稿紙　飴ん坊
失恋へベルトコンベヤー休みなく　方大
靴下の穴を気にした坐りよう　天風
靴下の穴がひろがる独り者　辰子
胃袋が古靴下に似る悩み　告天子
御利厄のある石段は高いけど　方大
石段も踏まれどうしかお元日　夢庵
石段でちょつと甘えるベタハーフ　谷水
石段を腰掛にする写生の子　千代春
石段で姑が止つたから止まり　馱仏
とりまきを酔はして抜けた祝酒　同
月給があがつて家族と祝酒　明心
酔うまでは呑すと云うた祝酒　越鳥
今日だけは母もチョクとる祝酒　日出雄
祝われて膝もくずせぬ酒を呑み　方大
花言葉ずくめで書いたラブレター　香春
ライバルの方が大きな花の束　一善
ニコヨンも負けずさくらの下で喰べ　谷水
咲く花を待つてる様な池の水　夢庵
好きな人の机にばかり花を活け　素身郎
カッポレを踊る下役連れて行き　馬楽

川雑　**大聖寺支部句会**（石川県）

三月十四日　光郎居
野村味平報

持ち味を生かす板場の腕の冴え　酔羊
漬物の味を賞められよい女房　芳子
新妻の味付け本と首つ引　卓風
味自慢代々続く繩のれん　素百々
死別れ二号は矢張り外に置き　とよ
本妻と二号へ嘘の使い別け　桃園
地味で居てどこか二号の仇っぽく　味平
御用聞棚吊る二号に手を借られ　光郎

川雑　**貴生川支部句会**（滋賀県）

二月二十日　於　夢生居
黄瀬美秋報

仏の日新車が着いた出世ぶり　斗志
クライスラー故郷へ錦をかざる音　俊子
宿帳へ女中はゝんといつた顔　夢生
案内の女中OKと目で笑い　四苦峯
女中さん何を喰うのか皆んな肥え　斗志
子沢山風呂ジャンケンをして入り　美秋
ぬるかつたまゝで上つたもらい風呂　同
母さんのニュース風呂屋で仕入れて来　四苦峯
カーテンも引かずころつとひとり者　夢生
カーテンの破れ久しき斜陽族　宵詩
金策が上手社長の気に入られ　木人
金策に困じ校友簿をひろげ　四苦峯

川柳友の会句会（大阪市）

二月十二日　於　帝国化工大阪工場
佐野白水報

巡査さ職務を捨てたい罪に逢い　英治
巡査かてみんなすられた新世界　一平
拳銃を盗まれ巡査青くなり　乱酔
迷い子を抱いて巡査の子煩悩　一朗
昼休みほころびも縫う女事務　寛峯
公務員昼休みだと取り合わず　辰始
親も子も猫も一ト間の昼休み　吉平
別れ道往来の多い方へ行き　同
この相場我が一生の別れ道　登志晴
別れ道過ぎて気弱さかみしめる　二代
もう合えぬ二人へせまる別れ道　一平
別れ道犬もやつぽり思案する　白水

みおつくし川柳句会（大阪市）

二月十一日　於　天王寺中学校
戸田古方報

流行へとにかく帽子買つただけ　武助
流行を着ても夫は気もつかず　凡九郎
やじ馬が騒いでボヤが記事になり　梨花
火が見えるかいと炬燵からたづね　古方
七生をたゝず火事にやけ太り　凡九郎
お化け出るらしい太鼓の響きやう　武助
二三日お化けになつた姉妹　正斗
誘われて結うたお化けの恥しさ　重男
柊に鰯鬼共おかしがり　雄声
鬼と呼ばれても私にはお父さん　凡九郎
鬼検事私生活ではあたゝかし　雄声
患えば肌身離さぬ金も出し　同
やくよけにこびりついているほこり　古方
参道でわてかてあんた厄だんが　花香
不採用印象が悪いとは云えず　雄声
印象へ嫁いでからのケタ違い　花香

南海電鉄川柳句会（大阪市）

於　親和寮
友淵貴山報

児が出来てから愛人の声でなし　摩天郎
愛人の足音今夜下駄の音　貴山
愛人を迎えるバスのもどかしく　雄声
愛人にもう酒の量かくされず　梅志
愛人と二人で歌の玉手箱　玲人
礼装を見せたい人にやつと会い　雄声
礼装も後がつかえる借衣裳　吉川
丈合はぬ礼装乍らよく歌い　無尽
年の瀬やこれ見よがしの鏡餅　吉川
鏡餅成金という市で出来　摩天郎
初列車に改札掛出て居らず　伯州
初列車のハンドル特に冷た過ぎ　圭水
初列車は河内平野の風を切り　玲人
木津へ行く籠は初発を狭うする　南風郎
初列車で結び直したスキー靴　同
信仰に初列車寒い顔もせず　貴山

明和川柳青蛙句会（尼崎市）

一月十五日　於　明和病院
山本九里三報

十八の乙女心の初詣り　酔歩
かけひきが下手で一生サラリーマン　静峰
見舞客の足音我が部屋を過ぎ　ひでを
冬の朝学校まではかけつこで　夕鈴
鏡餅正月らしく坐り居り　至不也
かえれぬ身離れて一人餅を焼き　桔梗
餅つきの音泣いて笑つた歳もくれ　里奴
一寸だけ新聞配達火にあたり　五月坊
豆餅に故郷の味を思ひだし　呉人
末の子も歩き通した初詣り　満秋
かけひきが過ぎて娘にこうが立ち　白涙
朝もやに吸い込まれ行く初詣　白馬
おろし餅つける家計にゆとり出来　成子
初詣今年の運を信じたい　牧人

東京そばと灘一とすじ
アベノ橋地下映画食堂街
梅里の店　大萬

★大万川柳（第卅九回）を募る
兼題「日延べ」　路郎先生選
締切・五月十五日　句数五句以内
★近畿映画ビル建設工事のため五月末日迄地下食道街休業、但し大万川柳は依然として存続致しますので右期間中の御投句は左記へ
阿倍野区松崎町三丁目一〇
大万川柳会宛

公・私・雑・記

★私は三月二十七日急に時計がとまつたように病臥してしまつた。何も喰べず、一本のタバコもすわず、訳もなく眠つていた。尤も夜も一時間毎に眼がさめた。うめいていたそうであるが、自分にはうめいたと云う記憶はない。病臥は突然であつたが、原因は突然でないことが自分にもよく判つていた。ここ二ヶ年程の仕事のムリがたたつたのである。ゼンソクのような咳が立てつづけに出だすと大変な苦しみ方である。熱は九度六分ある。主治医の東博士や、中島生々庵博士の注意で面会謝絶の処置がとられた。自分ではそれほど悪いとは思わないが、会えば、しやべる。すると、そのあとはムヤミに咳が出て苦しんだ。見舞に来てくれた人達や用務で来た人達に面会しないと云うことは、なんだかすまないような気がしたが、その処置が快方へ向くことを早めたことは確かだつた。中島博士の好意で、安岡珊枝郎博士の診察を煩わしたが、病源は睡眠不足と疲労だと云うことであつた。少し快方へ向くと新聞の締切ものや、雑誌の仕事が気になり、一寸手をつけて見たが全くダメなのでよく〳〵のつぴきならぬものだけ病床にあつて片づけた。雑誌の方は梨里が懸命になつてやつてくれた。四月十一日にはじめて用便を足すために二階から降りて、自分で面会謝絶の紙を剝いでしまつたが又熱が出た。まだ床を出てはいけないことが判つたので床の中にいることにした。大分いい方であるが、四月一ぱいは静養しなければと云うことである。いろ〳〵皆さんに心配をかけた。ひつきりなしに見舞に来ていただいて恐縮した。来ていただいてもお目にかかれなかつた人達や、見舞状をいただいた人達に誌上をかりてあつくお礼を申しあげる。（四月十七日路郎）

不朽洞会から

路郎師は五月八日午前六時三十分の趣味のしおりの時間BK川柳課題「男の子」の選評をされる▼桜川不水氏（下関市）は二月初旬東京芝浦を出て四月十二日に九州の佐賀ノ関に着くとの便りに接した。今度は濠洲の東方海上にあるニューカレドニア島へニッケル鉱を積みに行かれたとのこと▼三月で川雑・川柳祭（仮称）のことを報じておいたが、三月廿七日夜、生々庵居での不朽洞会常任理事会で右は「川雑・川柳・まつり」と決定したからお知らせする。▼路郎主幹は二月二十七日常任理事会当日から積日の激務の疲労の為病臥されましたので四月十一日の京番川柳会創立二十五周年記念全国川柳大会にも欠席された。▼長野井蛙氏（宇部市）は二月二十五日付で宇部職員会館長拝命、全日宇部市港町一丁宇部鉄道職員会館に赴任された。▼松江梅里氏は五月九日午前十時から大万川柳三周年記念川柳大会を大阪市阿倍野区松崎町三丁目一〇大万で開催される、兼題「大吉」路郎先生選「万才」賀峰選「川魚」梅里選「柳」ただみ選「会計」十九平選〆切当日正午（会員外で投句のみの方は三十円封入五月五日までに送附のこと、会費二百円（昼食を呈す）▼水谷鮎美氏（尼崎市）は三月二十七、八両日法事年回の為子息三人と、愛知県八開村へ帰郷され、「肉親のほとけのくにの春の風」の句信を寄せられた。北川春巣博士（大阪市）は大阪交通局病院に入院加養中のところ三月二十日全快退院。▼下関病院長阪田良坊氏は三月二十九日下関市発で三十日の広島県加計町にて開催の国鉄開通式典及国鉄二万キロ達成記念典へ下関地区代表として参列され、翌三十一日広島市を発し名古屋医大へ内科学会に出席、研究発表の上、引続き東京の会議へ臨まれ四月六日帰関せられた由。▼本田恵二朗氏（岡山県）は令兄が大原町の町長だつたが近村合併後の初代町長の選挙で多忙だつたそうだが幸い令兄が無投票当選されたとのことおよろこび申上げる▼安岡珊枝郎氏（大阪市）から路郎氏に宛て〻精々早く御快復の上、好きなビールも一二杯は却而よいかも知れぬ。「好物に食指動いて病癒え」の句を寄せられた。▼本田恵二郎氏（岡山県）からの消息によると三月十六日服部十九平氏の大原町来訪を期会に黒住教大原教会にて十九平氏を囲み句会開催▼牟田一哲氏（大阪市）の牟田病院架設電話が四月八日から電話大阪（26）五〇〇〇番に局番が変更された▼水谷竹荘氏は三月三十日博多へ出張、大宰府天満宮へ参拝すると「菅公もつまんでみたいうそのもち」と川柳放送をしている土産店があつたと▼浜田久米雄氏（岡山県）は三月二十三日附で岡山駅助役に昇格されたおよろこび申し上げる▼山根白星氏は福岡市西水茶屋町一八橋本産業KK福岡出張所へ転勤された▼家沢荠花氏は家事の都合で三月限退会された▼水田千石氏は校務多忙のため四月限で退会された。（摩）

新会員紹介

四月

谷野花蜂（岡山県）正
古谷馬洗（岡山県）正
光好三四詩（岡山県）正
森川東南（岡山県）正
小原宇柳（岡山県）正

弓削平氏推薦

募集

課題吟募集

古道具（廿句）大西八歩選
社宅（廿句）大森風来子選（五月二十日締切）
散歩（廿句）吉田水車選
自惚れ（廿句）浜田久米雄選（六月二十日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句）麻生路郎選
川柳塔（雑詠）麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）（毎月廿日締切）

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▲『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▲『課題吟』は何人でも投句が出来る。
▲『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

Printed in Japan

（載轉禁）

B列5号　毎月一回一日発行

川柳雑誌　第九巻第五号

定価　四〇円（送料四円）

半ヶ年　二六四円
一ヶ年　五二八円

昭和廿九年四月廿五日印刷
昭和廿九年五月一日発行

編輯兼発行人　麻生幸二郎
大阪市住吉区鷗南五代西五丁目二五番地

発行所　川柳雑誌社
振替口座　大阪七五〇五〇
大阪市住吉区鷗南五代西五丁目二五番地

昭和廿七年二月廿日第三種郵便物認可　（毎月一回一日発行）　昭和廿九年九月廿五日印刷納本　昭和廿九年九月廿五日印刷納本　昭和廿九年九月廿五日発行

THE SENRYU ZASSHI

NO・324

Published monthly by Senryu Zasshisha. Osaka, Japan.

胃潰瘍
胃痛・胃酸過多
十二指腸潰瘍
予防・治療
ファイナリン
潰瘍を促進させる胃液酸度を低下させ、同種剤中副作用がいちばん少く、価格も低廉な新原園療法剤です。予防にもよい。
山之内

大阪名菓
なにかにかのせ
浜氏と最中
百貨店著名菓子店にあります
大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九
民かまど本舗
電話㊀三四〇九

魚つり海
加太・小島・谷川
淡輪・箱作・和歌浦
魚つり電車　なんば毎朝5時発
南海電車

第三二四號　柳川雜誌　定價四拾圓　送料四円